2005・No.5　　2005年9月15日発行 (通巻153)

神経科学ニュース

Neuroscience News・Japan Neuroscience Society

〒113-0033　東京都文京区本郷7丁目2-2本郷ビル9F
日本神経科学学会
TEL: 03-3813-0272 FAX: 03-3813-0296
E-mail office@jnss.org

Neuroscience2006第29回日本神経科学大会のご案内

2006年の第29回日本神経科学大会(大会長:木村　實[京都府立医科大学大学院医学研究科])は、2006年7月19日(水)から21日(金)までの3日間、国立京都国際会館(京都市左京区宝ヶ池)で開催します。只今、プレナリーレクチャー、企画・公募シンポジウム、Travel Awardなどの準備を進めております。最新の情報や詳細は、随時、大会ホームページに掲示しますのでぜひご覧ください。
(http://www.congre.co.jp/neuro2006/)

目　　次

Neuroscience2006第29回日本神経科学大会のご案内 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第28回(2005)日本神経科学大会のご報告 ・・2
第67回理事会議事録 ・・・3
平成17年度日本神経科学学会総会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
動物の輸入届出制度について ・・・15
会員の皆様への重要なお願い：新しい会員データベース・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
Neuroscience2005第28回日本神経科学大会に参加して ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第28回日本神経科学大会見聞記・・18
Neuroscience 2005に学ぶ『神経科学研究と環境問題』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第28回神経科学大会託児室を利用して・・20
生理研研究会「脳神経科学・精神医学の主要ツールとしての遺伝子改変
マウスの表現型解析」に参加して・・・21
特定領域研究「統合脳」ワークショップ・サテライトシンポジウム・
合同班会議に参加して(1)　"松代の熱い四日間"・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
シンポジウム・研究会のお知らせ・・・25
研究助成・・28
公募・・29
その他・・32
編集後記・・・32

なお、大会までの主な予定は以下の通りです。

2005年 9月中旬　公募シンポジウム募集開始
2005年12月20日(火)　一般演題募集開始・事前参加登録募集開始
2006年 2月13日(月)　一般演題登録締め切り
2006年 7月19日～21日　第29回日本神経科学大会

京都で開催の第29回日本神経科学大会への多数のご参加をお待ちしております。
また、積極的なシンポジウムの企画・提案をお願いいたします。

＜プログラム概要＞
1. プレナリーレクチャー
William T Newsome III(Stanford University, USA)
Tobias Bonhoeffer(Max-Plank Institute, Germany)
Lynn T Landmesser(Case Western Reserve University,USA)
Allan Hobson J.(Harvard University, USA)

2. 特別講演
丹治　順(玉川大学学術研究所)
3. 企画および公募シンポジウム
9月中旬より募集開始予定です。募集概要は大会ホームページ(http://www. congre.co.jp/neuro2006/)に掲示しますのでご参照ください。
4. 一般口演およびポスターセッション
2005年12月20日募集開始、2006年2月13日締切です。
募集概要は大会ホームページ(http://www.congre.co.jp/neuro2006/)に掲示しますのでご参照ください。
5. ランチョンセミナー
只今企画を募集中です。
6. 機器・書籍展示
只今出展企業を募集中です。
7. 市民公開講座:
高校生 / 大学生のための神経科学入門(仮)
お問い合わせは下記事務局までメールにてお知らせください。

株式会社コングレ
〒541-0047　大阪市中央区淡路町3-6-13
E-mail:neuro2006@congre.co.jp

第28回(2005)日本神経科学大会のご報告

第28回日本神経科学大会大会長
東京大学医学系研究科統合生理学

宮下　保司

標記大会は、2005 年7月26日(火)-28日(木)の3日間、パシフィコ横浜で開催され、3000名を超える多数のご参加をいただき、無事終了致しました。台風7号の来襲による大会初日の風雨にもかかわらず、活発な講演・ポスター発表・討論で大会を盛り上げてくださった参加者の皆様に感謝いたします。

発表演題数は、特別講演5題、受賞講演3題、シンポジウム演題235題、一般口演110題、ポスター演題894題、ランチオンセミナー演題21題、合計1268題でした。参加者数は、事前登録者が1837名、当日登録者が1091名(うち学部学生170名)で、非会員で登録を免除したシンポジスト等を含めますと、参加者総数は3080名に達します。単独大会としては従来より700名も多い(30%増の)盛会となりました。参加者数が大会プログラム印刷部数を超えたため、一部の当日参加者の方には大会プログラム冊子をお渡しできなかった(コピーで代替しました)等の不手際も発生しましたが、本研究分野の進展を示す喜ばしい活況であったと総括しております。

今大会ではいくつかの新しい試みを導入いたしました。これらの試みが成功であったかどうかを、参加者からのアンケート結果や第三者評価等のフィードバックを用いて評価中です。まず第一に、大会国際化をめざしてトラベルアウォードの充実をはかり、海外在住の日本人ポスドク及びアジア地域若手研究者から合計 34名に授賞しました。この試みは大会会場でのアジア地域研究者等との実質的討論に反映され、またIBRO(国際脳研究機構)役員の外国人参加者からも高く評価されてIBROを巻き込んで日本神経科学学会の場における国際交流を発展させる計画へと進みつつあるのは喜ばしいことです。第二に、大会発表を英語化する試みとして、討論は日本語・英語どちらでも可という条件を維持しつつ、シンポジウムは基本的に英語、一般口演発表スピーチでも英語を推奨(日本語も可)

しました。アンケートでみる参加者の意見は多様であり、もう少し時間をかけて学会員の意見を検討する必要があると考えます。第三に、各講演会場へ発表用PCファイルをLAN配信しました。技術的トラブルは無く、発表者からも好評のようです。この方法は大会運営コスト削減にも貢献するので、今後の大会における使用も検討されるべきだと考えます。第四に、ポスター会場・機器展示会場は、6000 m^2 という従来の倍の面積を使い、フードコーナー・ドリンクコーナー・休憩区画・インターネット区画・機器展示区画を同心円状に配置した斬新なデザインを試みました。アンケートにみる参加者の声は多様で、学会員が気楽に集い情報交換・収集ができる空間を造る、という趣旨を実現する為にこのやり方が良いかどうか検討が必要です。今回のポスター・機器展示会場の設計は、機器展示に参加してくださる企業様からの要望を聞き、さらに一般企業スポンサー(例えばダスキン)の参入を認め大会運営費の削減を図る、という試みを含んでいました。これらの試みの評価は一回では不可能ですので、次回以降の大会長へと引き継ぎたいと思います。第五に、大会プログラムCDROMは、MacOSXに対する対応等の問題はありましたが、有用性を評価する声が多かったように思います。しかし、プログラムCDROM作成はコスト上昇要因となりますので、会員からの声を更に伺いたいというのが率直な気持ちです。第六に、男女共同参画社会の実現をめざす一環として大会会場内に託児室1室および親子休憩室2室を設けました。お使いいただいた参加者の方々からは大変高い評価をいただいて力づけられましたが、利用人数自体はこれまでの大会と同様に少数にとどまりました。今回の大会は、託児室・親子休憩室の宣伝には努力いたしましたので、利用者数が少ないということには単に大会運営の問題だけではない根の深い問題が含まれている、と考えざるを得ません。会員の皆様からの意見を伺いたい問題のひとつです。第七に、今大会の懇親会(NEUROsocial)は、若手研究者が特別講演・シンポウム講演者をはじめとする先生方と気軽に話ができる環境を提供することをめざし、参加費を安価(事前参加1000円)に設定する等の努力をしました。当日は、学会史上最大の500名近くもの方に参加いただく大盛況となりました。会場風景を取材していたNHKのビデオ班からも高い評価を頂きました。参加者アンケート結果からも高い評価が伺われます。今後は、多数の参加者を得て、どのように学問の活性化の手段として役立てていくかという実質を掘り下げることが重要と考えます。第八に、大会前日に「高校生のための神経科学入門」を開催しました。従来の市民講座路線からの転換の試みでした。講演とデモ実習に100名近い参加者を得て、神経科学の遠い将来を耕す努力を始めたつもりです。第九に、参加費の支払方法を、従来の郵便振替に加えてクレジットカード決済、銀行口座振込、コンビニ決済の中のどの方法でも可能としました。利用実績を見ますと、クレジットカード決済が一番多く、郵便振替がそれにつぎ、コンビニ決済も20%以上の方がご利用くださいました。利便性という観点からは、明らかに今年の方法が優れていると思われます。しかし、この利便性の向上は大会運営コストの上昇(クレジットカード手数料等で約100万円)という代価の上に成り立っています。現在、大会予算のうち参加費収入で賄われるのは全体の約30%に過ぎず、大半は企業・財団からの寄付等を集める大会組織委員会の営業努力によって支えられています。大会の財務基盤・予算規模をどのように考えるべきかは、神経科学学会のミッションをどう考えるかと関連しており、学会理事会とともに学会員の皆様にも是非お考え頂きたい重要な問題と思います。第十に、大会運営の年度ごとの継続性を確保するために学会事務局を強化する試みを、学会理事会のご理解を得てすすめました。今回の経験を生かして来年以降の大会を更に充実させるため、上で私が提起した点を含めてお気づきになった点をご遠慮なく学会事務局(office@jnss.org)へお寄せ下さい。皆様の声を受け止める体制を整備したつもりです。

最後に、ご参加くださいました皆様、プログラム委員・組織委員の方々、また、大会の運営に多大のご支援・ご尽力をくださいました団体、企業と関係各位の皆様に、この場を借りて、心からお礼申し上げます。

第67回理事会議事録

日時:2005年7月25日(月)　17時～20時30分
出席:津本忠治会長、宮下保司庶務理事・大会理事(2005年)、森憲作会計理事、狩野方伸広報担当理事、村上富士夫大会理事(2004年)、木村實

大会理事(2006年)、伊佐正、入來篤史、小澤瀞司、金子武嗣、加藤進昌、田中啓治、西川徹、貫名信行、真鍋俊也、岡本仁、大隅典子、桐野高明、小泉英明、藤田一郎、八木健各理事、柚崎通介ホームページ編集小委員会委員長

欠席、大森治紀、岡野栄之、小野武年、川人光男、高橋智幸、祖父江元各理事

報告 事項

1. 庶務報告:　宮下庶務理事より2005年7月15日時点での会員構成の状況が報告された(資料1)　(新入会員名は資料2参照)。会員総数は前回に比して約400名増加し約4,550人となった。今後、さらに増加することを期待している。

2. 会計報告:　森会計理事より2005年6月30日までの中間報告がなされた。今年4月より日本神経科学学会事務局内にNeuroscience Research編集部が大阪大学より移転・開設となったために、管理費として毎月125,000円を学会会計に支払う。ホームページリニューアルのために、1,050,000円および、毎月25,000+消費税の管理費を支払うこととなった。また、津本会長より、日本学会事務センター破綻にともなう債権として7,106,707円があったが、和解交渉委員会の仲裁を得て、最終的に209,748円の返金があった旨の補足説明があった。(資料3)

3. 委員会報告:

1) 対外広報小委員会:　入來理事(対外広報小委員会委員長)より、(1)米国神経科学学会から日本学術会議経由で、日本の神経科学研究を紹介する展示の可能性について打診があった旨の説明があった。津本会長を含めて委員会で検討したが、急な打診で準備時間がほとんどない等の理由により今年度は見送ることとなった。(2) 第28回大会より「プレス・ルーム」を開設し、報道関係者の取材を受け入れることとなった旨が報告された。現在まで、2社の記者クラブより依頼があり、またNHKから脳科学の番組制作のための取材依頼の申込があり撮影を了承したことが報告された。

2) 動物実験・倫理委員会:　伊佐理事(動物実験・倫理委員会委員長)より、現在の動物実験に関する懸案事項について説明があった。

3) 研究体制委員会:　大隅理事より生物科学連合に関する報告があった。

4. 27回大会(Neuro2004)報告:　村上理事(第28回大会大会長)より、Neuro 2004の会計報告があり承認された。

5. 第28回大会準備報告:　宮下第28回大会大会長より準備状況が報告された。(1)演題登録に関して、筆頭発表者の会員登録チェックに力を入れ、会員登録確認後に正式に演題発表を受領。(2) Travel Awardのうち、Special Travel Awardの参加者全員に外国人会員として会員登録を依頼した。今後、外国人会員の対応についての検討が必要である。(3)協賛企業の安定的な獲得が今後の課題である。(4)参加費については、今回より支払い方法として、クレジットカード、コンビニ決済、銀行振込みでの支払いを可能としたが、クレジットカードでの払い込みが最も多かった。(5)CD-ROMの著作権について、日本神経科学学会側と大会委託業者コングレの両方で、使用することを了承しあう契約書を交わした。

6. 第29回大会準備報告:　木村第29回大会長より準備状況が報告された。大会のテーマとして、国際化、若手研究者の育成等が挙げられている旨の報告があった。

7. 第30回大会準備報告:　田中第30回大会長より準備状況が報告された。2007年大会は、日本神経科学学会、日本神経化学会　日本神経回路学会の合同大会として開催する。すでに会場をパシフィコ横浜で、2007年9月9日から、12日まで、仮予約済みである。2008年度以降に、脳科学連合大会を継続的に開催する案を検討中であることが報告され、日本神経科学学会としての対応について検討した。

8.Neuroscience Research関係:津本忠治NSR編集主幹より以下の報告がなされた。

1)2005年1月より6月末までの投稿数は半年間で165篇。入稿原稿の61.8%は海外から。採択率は約40%であり、昨年よりさらに低下傾向にある。

2)2004年のImpact Factorは2.155であり、2003年とほぼ同じ水準である。

3)学術振興会からの科学研究費学術定期刊行物の補助金が、平成17年度は昨年度を上回る額が内定している。NSRの会計には、大きな問題はない。

4)2004年のNSR優秀論文賞に3篇を選出した旨が報告され、審議の結果、3篇へのNSR優秀論文賞授与を承認した(3篇については総会報告参照)。

9. IBRO・FAONS関係報告:　岡本国際理事(IBRO/Asia-Pacific Regional Committee 委員)よりIBRO/APRCの主催するIBRO School等について報告があった。

審議事項

1. 学会年会費の納入方法について:　今後の年会費の支払い方法として、銀行引落し方式の導入を

検討した。
2. 大会開催経費の学会からの補助について:　大会会計は基本的に独立会計として、必要があれば学会会計より借り入れをし、大会終了時に返金する、という案について検討を行った。
3. 第31回(2008年)大会について:　大会長を岡野栄之理事(慶應義塾大学)に決定し、総会に諮ることとなった。
4. 第32回(2009年)大会について:大会長を伊佐正理事(自然科学研究機構・生理学研究所)に決定し、総会に諮ることとなった。
5. 2009年国際生理学会との関係について: 2009年に国際生理学会が京都で開催されることを考慮にいれ、連携を伊佐理事を中心として検討することとなった。
6. 外国人会員制度について: 今後、国際化対応委員会(岡本委員長)で検討することとなった。
7. 電子化および学会ホームページ・サーバーについて: 柚崎通介ホームページ編集小委員会委員長より、インターネットプロバイダーを9月1日より変更し、データーベースを整備し、さらに日本神経科学学会から会員へのメール配信システムを構築するとの計画案が提案され、了承された。
8. 奨励賞選考および同規程について:真鍋理事・奨励賞選考委員より、奨励賞規定の改正案が提出され了承された(資料4)。

資料1

日本神経科学学会会員構成

(2005年7月15日)

	正会員	学生会員
1　分子・細胞神経科学	1902(85)	278(100)
2　システム神経科学	1426(47)	244(88)
3　臨床・病態神経科学	494(24)	35(17)
4　パネル不明	106(4)	12(9)
合計	3927(160)	567(214)
外国人会員	25(24)	
賛助会員(1)	3	
賛助会員(2)	15	
名誉会員(名誉会長を含む)	14	

( )内は新会員

退会　正会員 126名　学生会員 13名　合計　139
移動　正会員→学生会員　16名
正会員→名誉会員　4
名誉会員 1

資料2
新会員
正会員　　160名

パネル1、分子・細胞神経科学　85名
青木　俊介　国立精神・神経センター神経研究所 神経研究部 疾病研究第4部
赤石　樹泰　武蔵野大学薬学部薬理学研究室
阿形　清和　理化学研究所　発生・再生科学総合研究センター
赤星　英一　(株)東芝　研究開発センター 環境技術ラボラトリー
池田(荻上)真理　東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻　生命環境科学系川戸研究室
伊藤　敦子　(財)東京都臨床医学総合研究所 医薬研究開発センター(2)
稲村　直子　大阪大学大学院　生命機能研究科 脳発生生理研究室
上山　友子　神戸大学 大学院医学系研究科 脳科学講座分子脳科学分野
内野　茂夫　国立精神・神経センター神経研究所
OTANI SATORU　Neurobiologie des Processus Adaptatifs University of Paris e-CNRS
岡田　俊昭　理化学研究所　脳科学総合研究センター　胞培養技術開発チーム
柿崎　利和　群馬大学大学院医学系研究科　脳神経発達統御学講座遺伝発達行動学分野
笠井　陽子　(株)三菱化学生命科学研究所
片倉　賢紀　島根大学 医学部環境生理学
片山　圭一　理化学研究所　脳科学総合研究センター　比較神経発生研究チーム
神崎　ゆかり　理化学研究所脳科学総合研究センター　神経回路発達研究チーム
北中　順惠　兵庫医科大学　薬理学教室
喜多村　和郎　Wolfson Institute for Biomedical Research University College London
木下　滋晴　理化学研究所　脳科学総合研究センター　発生遺伝子制御チーム
木原　武士　京都大学 大学院薬学研究科創　薬神経科学
熊丸　絵美　国立精神・神経センター神経研究所 疾病研究第三部

桑原（藁科）知子　産業技術総合研究所ジーンファンクション研究センター機能性RNA研究チーム
小池　千恵子（財）大阪バイオサイエンス研究所 第４研究部
河野　優　東京慈恵会医科大学 神経内科
小西　慶幸　自治医科大学　分子病態治療研究センター
小林　正友　筑波大学大学院 生命環境科学
小松崎　良将　日本大学文理学部　物理生命システム科学科
小山　佳久　大阪大学大学院　医学系研究科ポストゲノム疾患解析学講座
斎藤　哲一郎　千葉大学大学院医学研究院 発生生物学領域
作村　諭一　奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科
櫻井　省花子　国立精神・神経センター 神経研究所 疾病研究第四部
白井　良憲　理化学研究所　脳科学総合研究センター　記憶学習機構研究チーム
杉浦　重樹　奈良県立医科大学　先端医学研究機構　組換えDNA実験施設
圖子田　康　国立精神・神経センター神経研究所 疾病研究第四部
関口　正幸　国立精神・神経センター神経研究所 疾病研究第４部
瀬藤　光利　岡崎統合バイオサイエンスセンター ナノ形態生理
相馬　美歩　国立精神・神経センター 神経研究所 微細構造研究部
平　敬宏　北海道大学 大学院薬学研究科
高鳥　悠記　同志社女子大学薬学部薬理学教室
高村　歩美　鳥取大学生命機能研究支援センター 遺伝子探索分野
田川　義晃　京都大学大学院理学研究科生物物理学教室
辰巳　晃子　奈良県立医科大学第二解剖学
舘野　美成子　国立精神神経センター　神経研究所　疾病研究第５部
田中　英臣　理化学研究所　脳科学総合研究センター　発生遺伝子制御チーム
多羽田　哲也　東京大学分子細胞生物学研究所
玉野上　佳明　産業技術総合研究所 脳神経情報研究部門
寺薗　英之　長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 病態解析・制御学神経機能学
滕　俊琳　東京大学大学院医学系研究科解剖学・細胞生物学教室
長井　薫　山梨大学大学院 医学工学総合研究部 環境遺伝医学講座
中田　勝紀　Department of Biology329 Sinsheimer LabsUniversity of California Santa Cruz
並木　繁行　名古屋大学 大学院医学系研究科細胞生理学
西田　和彦　大阪大学生命機能研究科 村上研究室
西村　隆史　名古屋大学 大学院医学研究科細胞情報薬理学講座
橋本　款　東京都神経科学総合研究所 病態代謝化学
橋本　道男　島根大学医学部環境生理学
橋本　康弘　理化学研究所　フロンティア研究システム 糖鎖機能研究チーム
秦　敏宏　東京都神経科学総合研究所
花田　圭司　滋賀医科大学　分子神経科学研究センター
久田　清人　奈良教育大学　福研究室
廣野　守俊　理化学研究所　脳科学総合研究センター　神経回路メカニズム研究グループ
武　勝昔　第四軍医大学基礎医学部解剖学
深澤　伸名　東京都神経科学総合研究所 分子発生生物学
深田　正紀　国立長寿医療センター研究所遺伝子蛋白質解析室
深田　優子　国立長寿医療センター研究所遺伝子蛋白質解析室
福井　一　奈良教育大学　音楽教育講座
藤谷　昌司　千葉大学大学院医学研究院神経生物学
布施　俊光　東京大学大学院医学系研究科神経生化学
細川　浩　京都大学大学院情報学研究科知能情報学専攻生体情報処理小林研究室
本間　千尋　沖縄大学院大学先行的研究事業
松崎　伸介　大阪大学大学院　医学系研究科神経機能形態学講座
松野　元美　東京都神経科学総合研究所
間藤　光一　大阪大学大学院医学系研究科神経細胞医科学(D13)
三井　真一　高知大学医学部神経生物・解剖学教室
緑川　良介　東京大学大学院医学系研究科分子細胞生物学教室

村山　明子　（株）三菱化学生命科学研究所
守村　直子　理化学研究所　脳科学総合研究センター　比較神経発生研究チーム
矢尾　育子　三菱化学生命科学研究所
山本　雅　東京大学 医科学研究所　癌細胞シグナル
吉川　文生　理化学研究所　脳科学総合研究センター　分子神経形成研究チーム
ル・ディン　ツン　理化学研究所脳科学総合研究センター　記憶学習機構研究チーム
若松　正樹　大正製薬株式会社　医薬動態・安全性研究所
藁科　雅岐　独立行政法人産業技術総合研究所ジーンファンクション研究センター
王　玉来　国立精神・神経センター神経研究所　疾病研究第四部
Hon Kit WONG　理化学研究所　脳科学総合研究センター 構造神経病理研究チーム
Peter B HAJDU　東京大学　大学院理学系研究科　生物科学専攻

パネル２、システム神経科学　47 名
飯島　淳彦　新潟大学 大学院医歯学総合研究科感覚統合医学講座統合生理学分野
上野　賢一　理化学研究所脳科学総合研究センター認知機能表現研究チーム
大野　裕史　鹿児島大学工学部情報工学科
亀山　克朗　理化学研究所脳科学総合研究センター神経回路メカニズム研究グループ津本研究ユニット
金野　竜太　昭和大学 医学部神経内科
栗脇　淳一　金沢医科大学　健康増進予防医学
小池　康晴　東京工業大学　精密工学研究所
古賀　けい子　大塚製薬（株）徳島研究所
五味　裕章　NTT コミュニケーション科学基礎研究所　人間情報研究部
小渡　康行　筑波大学大学院 人間総合科学研究科　感性認知脳科学
篠本　滋　京都大学 理学研究科
杉本　俊二　豊橋技術科学大学
宝田　雄大　早稲田大学　スポーツ科学学術院
伊達　紫　宮崎大学医学部第三内科
田中　靖人　情報通信研究機構脳情報グループ
角田　和繁　東京医療センター　臨床研究センター　視覚生理学研究室
堂西　倫弘　和歌山県立医科大学　第一生理
任海　学　新潟大学脳研究所　システム脳生理学分野
TRAN Hai Anh　富山医科薬科大学大学院医学研究科　分子・統合情動脳科学講座
中尾　和子　関西医科大学　第二生理
中釜　勇人　理化学研究所　脳科学総合研究センター　視覚神経回路モデル研究チーム
中谷　智恵　理化学研究所 脳科学総合研究センター認知動力学研究チーム
西条　旨子　金沢医科大学　健康増進予防医学
西村　幸男　自然科学研究機構　生理学研究所発達生理学研究系　認知行動発達研究部門
林崎　誠二　東京都神経科学総合研究所
林田　津安子　理化学研究所　脳科学総合研究センター　神経構築技術開発チーム
針本　哲宏　中京大学 生命システム工学部
平林　敏行　東京大学 医学部　統合生理学教室
福島　央之　獨協医科大学生理学（生体情報）
堀江　亮太　理化学研究所　脳科学総合研究センター　動的認知行動研究チーム
松本　幸久　東北大学大学院　生命科学研究科水波研
三嶋　竜弥　杏林大学 医学部　細胞生理学教室
南　哲人　独立行政法人　情報通信研究機構関西先端研究センター脳情報グループ
望山　洋　名古屋工業大学しくみ領域トヨタ自動車株式会社寄付講座
山口　奈緒子　高知大学 医学部神経統御学講座神経薬理学
山崎　由美子　独立行政法人理化学研究所　脳科学総合研究センター　象徴概念発達研究チーム
吉田　正俊　自然科学研究機構　生理学研究所発達生理学研究系　認知行動発達研究部門
吉田　和子　奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科
吉見　靖男　芝浦工業大学　工学部応用化学科
渡辺　愛子　理化学研究所　脳科学総合研究センター　発声行動機構研究チーム
Isabelle GEORGE　理化学研究所脳科学総合研究センター 発声行動機構研究チーム
ROYALLENWAGGONER　理化学研究所認知機能表現研究チーム

GRAHAM　A. COUSENS　Psychology & Neuroscience Studies Program Macalester College
JEROMERIBOT　理化学研究所　脳科学総合研究センター視覚神経回路モデル研究チーム
Abdolrahman Sarihi　理化学研究所脳科学総合研究センター神経回路メカニズム研究グループ
SASAKI-ZEREDOKatia M.　長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科生体情報科学
Ruifeng Cao　久留米大学医学部　生理学講座統合自律機能部門

パネル３、臨床・病態神経科学 24 名
柏　淳　東京医科歯科大学　大学院精神行動医科学分野
加藤　正樹　関西医科大学　精神神経科
川又　純　京都大学 医学部附属病院神経内科
桐野　高明　東京大学大学院　医学系研究科脳神経外科
久保田　健夫 山梨大学医学部環境遺伝医学
酒谷　薫　日本大学医学部　脳神経外科
坂本　誠　鳥取大学 医学部　脳神経外科
祖父江　元　名古屋大学大学院医学系研究科神経内科
鷹合　秀輝　東京医科歯科大学
瀧北　彰一　滋賀医科大学　小児科
茶木　茂之　大正製薬株式会社医薬研究所
羽生　春夫　東京医科大学　老年病科
平田　雅之　大阪大学 医学部　脳神経外科
古田　晶子　国立精神・神経センター 神経研究所 疾病研究第四部
松原　敏郎　山口大学医学部高次神経科学講座
毛利　育子　（財）大阪バイオサイエンス研究所第２研究部分子行動生物学部門
茂木　眞希雄 愛知学院大学　歯学部薬理学
森　隆　埼玉医科大学総合医療センター研究部
柳本　広二　国立循環器病センター研究所脳血管障害研究室
山本　直樹　東京医科歯科大学大学院　精神行動医科学
吉川　武男　理化学研究所　脳科学総合研究センター分子精神科学研究チーム
吉見　建二　順天堂大学　老人性疾患病態治療研究センター
渡瀬　啓　東京医科歯科大学脳神経機能病態学
HASHIMOTO TAKANORI　Dept. of Psychiatry University of Pittsburgh

パネル不明　４名
青山　真人　宇都宮大学農学部動物機能形態学研究室
石黒　雅敬　札幌医科大学医学部生理学第二講座
井上　浄　大阪大学大学院医学系研究科神経機能形態学講座
那　杰　東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科システム神経生理学

学生会員　214 名

パネル１、分子・細胞神経科学　100 名
有馬　史子　東京大学医科学研究所　基礎医科学部門　神経ネットワーク分野
石田　敦士　神戸大学 大学院医学系研究科脳科学講座分子脳科学分野
伊奈　鮎香　筑波大学大学院　人間総合科学研究科　感性認知脳科学専攻
今泉　千尋　横浜市立大学　大学院医学研究科分子薬理神経生物学講座
任　勇日　順天堂大学　医学部脳神経内科
宇田川　理恵 京都大学大学院　医学研究科認知行動脳科学
梅嶋　宏樹　理化学研究所　脳科学総合研究センター　神経細胞極性研究チーム
浦久保　知佳 大阪大学 大学院理学研究科生　物科学専攻
江本　由香子 九州大学 大学院理学府生物科学専攻
大石　悠貴　東京大学大学院理学系研究科
大久保　圭海 東京薬科大学　生命科学研究科生体高次機能学研究室
大澤　志津江 東京大学 大学院薬学系研究科遺伝学教室
大下　美雪　豊橋技術科学大学　物質工学系
大津　昌弘　首都大学東京　保健科学研究科神経再生科学部門
大西　新　北里大学大学院医療系研究科　生体機能医科学群脳機能科学研究室
小倉　雅子　東京薬科大学　生命科学研究科生体高次機能学研究室
長船　香織　北海道大学 大学院理学研究科

生物科学専攻
春日井　雄　自然科学研究機構・生理学研究所・脳形態解析研究部門
桂　弘和　兵庫医科大学　第二解剖学教室
加藤　明文　大阪大学 生命機能研究科
香取　将太　大阪大学大学院　生命機能研究科 時空生物学講座心生物学グループ
金子　雅博　東京大学 医学部大学院医学系研究科 神経生理学教室
金丸　和典　東京大学 大学院医学系研究科 細胞分子薬理
神谷　明裕　京都大学 大学院薬学研究科生体機能解析学分野
木村　周古　東北大学 大学院薬学研究科薬物送達学分野
清永　景子　奈良女子大学　理学部生物科学科 神経発生生物学
谷　新医　高知大学医学部神経精神医学教室
久保　篤彦　横浜市立大学　大学院医学研究科 脳神経外科学
古賀　亜希子　佐賀大学医学部生体構造機能学
古寺　美加　自治医科大学　神経内科
後藤　勲　九州工業大学大学院 生命体工学研究科　脳情報専攻
小林　香奈　金沢大学 薬学部病院薬学研究室
崔　洪海　京都府立医科大学　解剖学教室 生体構造科学部門
祭　友昭　東京慈恵会医科大学 整形外科
齊木　めぐみ　日本大学 生物資源科学部動物資源科学科
塩崎　元子　甲子園大学栄養学部 細胞生物学
塩田　惇　富山医科薬科大学　薬学部 分子神経生物学研究室
清水　秀忠　基礎生物学研究所　統合神経生物学研究部門
車多　厚志　新潟大学 脳研究所 附属生命科学リソース研究センター遺伝子実験部門
杉山　未来　筑波大学大学院人間総合科学研究科
鈴木　亨暢　大阪市立大学　大学院医学研究科 機能細胞形態学
鈴木　祐一　京都大学 大学院薬学研究科生体機能解析学分野
鈴木 - 平野　明日香　東北大学　加齢医学研究所 分子神経
須山　成朝　東北大学大学院　生命科学研究科 生命機能科学専攻　脳機能解析構築学 脳機能解析分野
関根　千晶　東京大学 大学院医学系研究科 分子神経生物学教室
瀬戸口　廣貴　奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科　分子神経分化制御学
宋　陽　滋賀医科大学　分子神経科学研究センター
高嶋　直敬　大阪大学 大学院医学系研究科 情報伝達医学専攻
高橋　亜紀代　東京都神経科学総合研究所 統合生理研究部門　分子神経生理研究部門
高橋　弘　昭和大学 薬学部薬理学
田辺　伸聡　東京大学大学院総合文化研究科 広域科学専攻生命環境科学系 脳生物物理学 / 神経科学
玉城　聡子　東北大学加齢医学研究所分子神経
短田　浩一　京都大学大学院医学研究科 先端領域融合医学研究機構 生体遺伝子機能解析グループ
千葉　幸恵　東京農工大学　大学院工学教育部 生命工学専攻
塚越　昭紀　東京農業大学大学院 農学研究科 バイオサイエンス専攻
鶴野　瞬　京都大学大学院　理学研究科 生物科学専攻　生物物理学系
鄭　英君　新潟大学 脳研究所　分子神経生物学分野
Delawary Mina　東京大学　医科学研究所 癌細胞シグナル
得田　久敬　慶應義塾大学医学部 解剖学教室
徳毛　孝至　福山大学 薬学部　応用薬理学
豊島　学　長岡技術科学大学　生物機能工学専攻　神経機能工学
豊島　久美子　大阪大学大学院
中島　健太郎（株）三菱化学生命科学研究所
中島　央美　横浜市立大学　大学院医学研究科 分子薬理神経生物学講座
中嶋　浩平　東京大学大学院総合文化研究科 広域科学専攻生命環境科学系
中谷　佳弘　京都工芸繊維大学　繊維学部 応用生物学科
鳴海　栄　東京薬科大学　生命科学研究科 生体高次機能学研究室
西　明紀　国立遺伝学研究所　マウス開発研究室
西村　研吾　神戸大学大学院総合人間科学研究

科 人間環境科学専攻自然環境論
西村 洋介 京都工芸繊維大学 繊維学部 応用生物学科
西山 潤 東京大学 大学院医学系研究科 脳神経医学専攻精神医学
西山 智子 名古屋大学大学院医学系研究科 細胞生物物理
任 鳴 名古屋大学 環境医学研究所 視覚神経科学
野口 由紀子 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 感性認知脳科学
野村 幸 北海道大学 医学研究科 生体機能学専攻 機能形態学講座 解剖発生学分野
服部 剛志 大阪大学大学院 医学系研究科 ポストゲノム疾患解析学講座
平田 伸幸 名古屋大学大学院 理学研究科 物質理学専攻
平本 恵子 広島大学大学院医歯薬学総合研究科 脳神経外科
藤原 達司 大阪大学大学院 医学系研究科 神経機能形態学講座
古市 隆大 東京農業大学大学院 農学研究科 バイオサイエンス専攻
堀 沙耶香 東京大学大学院 理学系研究科 生物科学専攻
牧之段 学 奈良県立医科大学 精神医学
水崎 真紀 京都工芸繊維大学 繊維学部 応用生物学科
水野 嘉彦 東海大学大学院開発工学研究科 生物工学専攻 神経工学
三橋 賢司 東京大学大学院 理学系研究科
三村 文昭 千葉大学大学院 医学研究院 神経生物学
三宅 邦夫 山梨大学大学院医学工学総合教育部 環境遺伝医学講座
村井 里菜 名古屋大学 大学院医学系研究科 医療薬学 付属病院薬剤部
村松 舞 横浜市立大学大学院 総合理学研究科 システム機能科学専攻
茂木 亮一 東京農業大学大学院 農学研究科 バイオサイエンス専攻
矢口 邦雄 理化学研究所脳科学総合研究センター行動遺伝学技術開発チーム
山岡 正慶 東京慈恵会医科大学 総合医科学研究センター 神経生理学
山崎 美和子 金沢大学大学院医学系研究科脳医科学専攻 シナプス発達・機能学
山下 直也 横浜市立大学 大学院医学研究科 分子薬理神経生物学講座
山田 康嗣 東京大学 遺伝子実験施設
山田 武志 北海道大学大学院 情報科学研究科 生命人間情報科学専攻 細胞情報工学研究室
横山 斉輔 理化学研究所 脳科学総合研究センター 神経細胞極性研究チーム
吉川 雅朗 筑波大学大学院 人間総合科学研究科
若林 良浩 京都府立医科大学大学院医学研究科 解剖学教室生体構造科学部門
Judy Chia Ghee SNG 金沢大学 薬学部 薬物学研究室

パネル2、システム神経科学 88名

相澤 憲 東京大学大学院新領域創成科学研究科先端生命科学専攻
青木 高明 京都大学 理学研究科 物理学宇宙物理学専攻非線形動力学研究室
阿部 修士 東北大学 大学院医学系研究科 障害科学専攻高次機能障害学
雨宮 誠一朗 東京都立大学 大学院理学研究科 身体運動科学専攻
安藤 あかね 岩手大学工学部福祉システム工学科
飯島 和樹 東京大学 大学院総合文化研究科 相関基礎科学科
井口 尚彦 電気通信大学大学院 情報システム学研究科情報ネットワーク学専攻
石田 裕昭 近畿大学 医学部 第一生理学講座
泉 安彦 京都大学 大学院薬学研究科薬 品作用解析学分野
一ノ瀬 裕 電気通信大学大学院 情報システム学研究科情報ネットワーク学専攻
一色 恵理子 日本大学 生物資源科学部動物資源科学科 動物育種学研究室
宇ノ木 佐会 東北大学 大学院 生命科学研究科
雲財 知 京都大学 大学院医学研究科 脳統御医科学系 高次脳科学講座 高次脳形態学教室
海老 紘彰 上智大学 大学院理工学研究科 電気電子工学専攻
江本 美穂 北海道大学大学院 医学研究科 高次脳機能学

大栗　重彦　神奈川歯科大学　人体構造学講座　組織学
大塚　剛郎　神奈川歯科大学　成長発達歯科学講座
大部　隆志　早稲田大学大学院人間科学研究科　スポーツ科学科彼末　研究室
岡田　研一　大阪大学 大学院生命機能研究科　脳神経工学
岡本　正博　大阪大学大学院　生命機能研究科　システム神経科学研究室（佐藤研究室）
小野　健太郎　新潟大学 脳研究所　システム脳生理学
笠原　敏史　北海道大学大学院　医学研究科　統合生理学
加藤　賢　上智大学 大学院理工学研究科　電気電子工学専攻田中昌司研究室
金子　礼奈　東京大学 大学院薬学系研究科　神経生物物理学教室
菊地　宏美　東邦大学大学院医学研究科 統合生理
木下　清二郎　京都府立医科大学大学院 精神神経科
木下　雅美　埼玉大学大学院理工学研究科　生体制御学
木村　塁　大阪大学 大学院生命機能研究科　脳神経工学
窪田　和　新潟大学 脳研究所システム脳生理学
熊田　聖子　山形大学 大学院理工学研究科　生体センシング機能工学専攻 山口研究室
小海　暁　東京医科歯科大学　医歯学総合研究科　咬合機能矯正学分野
越水　義登　京都大学 大学院医学研究科　高次脳形態学
小林　正樹　東京医科歯科大学　医歯学総合研究科　咬合機能矯正学分野
小松　三佐子　東京工業大学　総合理工学研究科　宮下研究室
佐藤　達雄　京都大学 大学院医学研究科神経生物学
柴田　治樹　京都大学 大学院薬学研究科薬品作用解析学分野
柴田　麻衣子　横浜市立大学　大学院医学研究科　生体システム医科学専攻神経解剖学部門
杉山　朋久　神奈川歯科大学人体構造学講座　組織学
鈴木　克彦　山形大学 医学部 形態構造医学
関川　明生　総合研究大学院大学 生命科学研究科生理科学専攻
曹　瑩　山東大学医学院　生理教研室
高尾　哲郎　新潟大学 脳研究所　システム脳生理学
高野　裕治　専修大学大学院文学研究科心理学
高橋　真有　東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 システム神経生理学
高原　大輔　明治薬科大学　薬学部薬剤学科
瀧　正勝　京都大学大学院　医学研究科　認知行動脳科学
竹中　絵梨果　九州工業大学　大学院生命体工学研究科　脳情報専攻
田嶋　主税　上智大学 大学院理工学研究科　電気電子工学専攻
田中　絢子　日本大学 生物資源科学部動物資源科学科　動物育種学研究室
田中　絵美　生理学研究所
田中　康裕　京都大学 医学部 神経細胞薬理学教室
谷村　洋子　Department of Psychology Behavioral Neuroscience Program
田村　英紀　奈良先端科学技術大学院大学　バイオサイエンス研究科細胞構造
俵　健二　金沢医科大学　健康増進予防医学
近添　淳一　東京大学大学院医学系研究科　統合生理学教室
張　薇　千葉大学 医学薬学府先端生命科学専攻　分子統合生理学
辻　健史　生理学研究所　感覚運動調節研究部門
津野　祐輔　東京大学 大学院医学系研究科　細胞分子生理学
鶴留　一也　九州工業大学大学院 生命体工学研究科　脳情報専攻
鄧　本祥　千葉大学 医学薬学府先端生命科学専攻　分子統合生理学
遠山　和也　東京工科大学　大学院メディア研究科
戸松　彩花　東京都医学研究機構 東京都神経科学総合研究所
中込　滋樹　北海道大学 大学院理学研究科
中野　美和　大阪大学 大学院生命機能研究科　認知脳科学研究室
中村　茂生　大阪大学 大学院薬学研究科複合薬物動態学分野

中村　晋也　東北大学 大学院生命科学研究科 脳情報処理分野
倪　雪松　電気通信大学大学院情報システム学研究科情報ネットワーク学専攻
新倉　慶一　星薬科大学　薬品毒性学教室
西谷　正太　長崎大学 大学院医歯薬学総合研究科 病態解析制御学　神経機能学
羽倉　信宏　京都大学大学院人間・環境学研究科 松村研究室
平井　康治　総合研究大学院大学 生命科学研究科生理科学専攻
平山　大輔　電気通信大学大学院情報システム学研究科情報ネットワーク学専攻
廣瀬　智士　京都大学大学院人間・環境学研究科 認知行動
藤川　哲兵　京都大学大学院 農学研究科　食品生物科学専攻　栄養化学
藤田　一寿　電気通信大学大学院 情報システム学研究科 情報ネットワーク学専攻
藤田　紘一　東京医科歯科大学　医歯学総合研究科　咬合機能矯正学分野
正木　大貴　京都府立医科大学精神医学教室
松山　皓治　東京大学 大学院薬学系研究科 薬品作用学教室
三浦　直樹　東北大学大学院工学研究科 未来科学技術共同研究センター
本村　啓介　九州大学 大学院医学研究院機能制御医学専攻神経形態学分野
森島　陽介　東京大学大学院医学系研究科　認知言語神経科学
安井　拓也　東京大学 大学院総合文化研究科 相関基礎
安岡　智子　大阪大学 大学院生命機能研究科 認知脳科学研究室
横井　功　自然科学研究機構　生理学研究所 生体情報研究系感覚認知情報研究部門
李　暁紅　九州工業大学大学院 生命体工学研究科　脳情報専攻
和田　真　順天堂大学医学部生理学第一講座
Gary Wilson　Wolfson Institute for Biomedical Research,University College London
Juan Carlos Toledo Salas　福島県立医科大学 医学部　生理学第二講座

パネル３、臨床・病態神経科学 17 名
赤芝　洋紀　東京大学 大学院薬学系研究科 薬品作用学教室
稲次　基希　東京医科歯科大学　医学部 脳神経外科
大泉　英樹　順天堂大学　医学部脳神経内科
柿澤　裕子　名古屋大学大学院医学系研究科
金子　雄二郎　東京医科歯科大学　大学院 精神行動医科学分野
佐藤　祐樹　東京大学大学院　新領域創成科学研究科　先端生命科学専攻
澤井　康子　京都府立医科大学　大学院医学研究科　小児発達医学
四宮　一昭　Waseda-Olympus Bioscience Research Institute, Waseda University
中富　康仁　京都府立医科大学　大学院医学研究科　精神機能病態学
西田　南海子　京都大学大学院 医学研究科脳病態生理学講座　脳神経外科
藤田　豊大　大阪大学 大学院歯学研究科顎口腔病因病態制御学講座
松本　有史　東北大学 医学部　神経内科
宮崎　晴子　理化学研究所　脳科学総合研究センター　構造神経病理研究チーム
山崎　信幸　京都大学大学院　医学研究科 脳病態生理学　精神医学教室
吉井　崇喜　京都府立医科大学　大学院医学研究科　精神機能病態学
吉田　誠克　京都府立医科大学神経病態制御学
吉村　奈津江　東京医科歯科大学　難治疾患研究所神経病理学

不明　9 名
岡田　誠司　慶應義塾大学　医学部生理学教室
籠橋　麻紀　順天堂大学　医学部第一生理
今野　剛志　北里大学 理学部生物科学科
澤畑　博人　山形大学 大学院理工学研究科 生体センシング機能工学専攻
塚原　直樹　宇都宮大学 農学部　動物機能形態学研究室
長谷川　智彦　浜松医科大学　整形外科
平山　東　大阪大学 大学院医学系研究科 神経機能制御外科学
前島　裕子　宇都宮大学農学部生物生産学
南澤　忠儀　山形県立保健医療大学　理学療法学科

2005年度日本神経科学学会会計　　資料３

（2005年１月１日－2005年６月30日）

		予算	予算修正	執行済み	備考
収入	前年度繰越金	6,625,263	6,625,263	6,625,263	
	会員入会金	900,000	900,000	1,116,000	2005年入会者数 374 人
	正会員年会費	31,338,900	31,338,900	14,363,000	2005年７月現在会員数 3927 人
	学生会員年会費	1,082,700	1,082,700	1,008,000	2005年７月現在会員数　567 人
	賛助会員年会費３万	81,000	81,000	0	2005年７月現在会員数　　３件
	賛助会員年会費 10万	1,350,000	1,350,000	0	2005年７月現在会員数　15 件
	前受金			3,000	
	預金利息	10	10	22	
	広告料	900,000	900,000	475,000	
	NSR編集室より管理費		1,125,000	375,000	125000×3
	雑収入	0		347,937	1)
	収入計	42,277,873	43,402,873	24,313,222	
支出	1, 事業費				
	ニュース印刷費	2,400,000	2,400,000	973,413	2005.NO1.NO2.NO3
	ニュース発送費	3,300,000	3,300,000	1,488,946	2005.NO1.NO2.NO3
	大会補助金	2,000,000	2,000,000	2,000,000	第 29 回大会へ
	NSR補助金	2,500,000	2,500,000	2,500,000	
	奨励賞賞金	400,000	400,000	400,000	
	優秀論文賞賞金	600,000	600,000	0	
	Travel Award賞金	1,000,000	1,000,000	0	
	会費分担金	2,100,000	2,100,000	438,880	2) IBRO2004年のみ支払済み
	学術活動支援費	700,000	700,000	200,000	生理研トレーニングコース支払済
	国際交流費	100,000	100,000	0	講師派遣、IBRO関係理事会出席
	調査宣伝費	350,000	350,000	100,000	弁護士顧問料、その他
	その他				
	2, 管理費				
	事務員業務委託費	6,000,000	11,500,000	2,480,165	フルタイム２人　パート１人
	保険・税金			669,337	社会保険等
	会議費	500,000	500,000	102,592	１月理事会支払い分
	通信費	2,000,000	2,000,000	326,325	振込み手数料カード引落し手数料
	旅費・交通費	900,000	900,000	616,020	
	印刷費	100,000	100,000	171,354	
	備品・消耗品費	350,000	350,000	40,004	
	事務室借料	2,951,025	2,951,025	1,261,050	
	電話・光熱料	300,000	300,000	162,984	
	レンタル料	700,000	700,000	243,998	3)
	雑費	0	0	58,635	4)
	3, その他				
	事業費積立金	250,000	250,000	250,000	
	大会抄録集制作発送費	1,200,000	1,200,000		
	ホームページ管理費			1,050,000	ホームページリニューアル等
	予備費	11,576,848	7,201,848	8,779,519	
	支出計	42,277,873	43,402,873	24,313,222	

事業費積立金 5837294円

1)事務センターからの返戻金 209648円　移転による払い戻し金 125289　ＮＳＲより 13000円
2)IBRO(2004年,2005年度分担金 4.000＄×2), FAONS(2005年度分担金 2$×正会員数), 生物科学学会連合(平成13年－17年度)
3)FAXコピー機レンタル料・ネット接続料・ドメイン資料用・貸し金庫使用料金
4)講習会費用 40000円　返金 7000円　英文校閲 2835円　クレジット手数料 8800円

資料4

日本神経科学学会奨励賞規定

1.（目的）

日本神経科学学会は、顕著な研究業績を有するとともに、将来日本神経科学学会で活躍することが期待される若手研究者を奨励することを目的として日本神経科学学会奨励賞(以下、奨励賞という)を設ける。奨励賞の英文表記は、Japan Neuroscience Society Young Investigator Award　とする。

2.（対象）

1）　3年以上の会員歴を有する満37歳以下の日本神経科学学会の会員を対象とする。

2）　受賞候補者は、原則として単名とする。

3.（選考）

1）　選考は公募による。

2）　応募者の中から毎年５名以下を選考する。

3）　奨励賞の選考は、奨励賞選考委員会が行う。選考委員会の構成は細則で定める。

4.（表彰）

日本神経科学学会大会において受賞者を表彰し、賞状及び副賞を贈呈する。

5.(受賞内容の発表)

受賞者は、受賞研究内容を「Neuroscience Research」誌に総説として発表する。

6.（改正）

本規定の改廃は日本神経科学学会理事会で行う。

本則は平成13年4月1日より施行するものとする。

日本神経科学学会奨励賞選考細則

1.（選考の対象）

奨励賞は個々の論文を対象とするものではない。申請者の研究実績、研究構想と発展性を評価して選考する。対象となる研究が実際に行われた場が日本国内・国外であることは問わない。応募者の主導により研究が展開された事を重視する。

2.（会員歴）

1）　学生会員であった期間は会員歴に含まれる。

2）　会費の納入が無かった期間は含まれない。

3.（選考委員会）

1）　選考委員会は8名（委員長を含む）で構成する。

2）　選考委員の任期は4年とする。

3）　2年ごとに半数の委員が交代するものとする。

4）　委員は、交代後2年間は再任しないものとする。

5）　選考委員は指名委員会が指名し、理事会での承認を必要とする。

6）　選考委員会委員長は、各年度ごとに、委員の互選により選出する。委員長の重任はしないものとする。

7）　選考結果発表までは、選考委員の氏名は公表しない。

4.（選考）

1）　選考委員は、応募のあった候補者が直接の研究指導を受けているか、または研究指導にあたった期間から3年以上経過していない場合には、当該候補者に関する採点・評価には加わらないものとする。

2）　選考実施の細目は申請件数、内容などに応じて選考委員会で検討する。

5.（応募）

1)応募者は申請書（所定の様式に従い、日本神経科学学会会員（学生会員、賛助会員を除く）による推薦のあるもの)、履歴書、主要業績リスト、申請課題に関する800字以内の抄録、申請課題に関連した論文（3編以内）の別刷（印刷中の論文については写し）各10部を選考委員会に提出する。

2)応募者の年齢は当該年の12月末日のものとする。

3)公募の締切りは毎年5月31日以前とし、選考委員会で定めた日をその年の神経科学ニュースと学会ホームページに掲載する。

6.（副賞の金額）

当分の間1件10万円とするが、状況により理事会の承認を得て改訂することができる。

7.（附則）

本則を平成13年4月1日より施行するにあたり、委員の半数は任期1年、他は任期2年とする。この場合の各委員の任期については、指名委員会が定める。

8.（改訂）なお、本細則は理事会で平成16年1月30日および平成17年7月25日に改訂された。

平成17年度 日本神経科学学会総会報告

日時:2005年7月26日(火)　17時～18時
会場:パシフィコ横浜　3F　313,314号室(Neuroscience 2005 会場内)

議題
1. 宮下庶務理事より2005年7月15日時点での会員構成の状況が報告された(理事会報告資料1及び2参照)。
2. 森会計理事より2005年6月30日までの会計中間報告がなされた(理事会報告資料3参照)。
3. 津本Neuroscience Research (NSR) 編集主幹より入稿状況、掲載論文の被引用状況等の報告がなされた。また、2004年のNSR優秀論文賞受賞論文として以下の3論文を選定した旨報告があった。

Maya Yamazaki, Takako Ohno-Shosaku, Masahiro Fukaya, Masanobu Kano, Masahiko Watanabe and Kenji Sakimura, A novel action of stargazin as an enhancer of AMPA receptor activity (Research Report)　50, 369-374, 2004.

Kenji Yoshiyama, Takanori Uka, Hiroki Tanaka and Ichiro Fujita, Architecture of binocular disparity processing in monkey inferior temporal cortex (Research Report) 48, 155-167, 2004.

Masaharu Kudoh, Kenjiro Seki and Katsuei Shibuki, Sound sequence discrimination learning is dependent on cholinergic inputs to the rat auditory cortex (Research Report) 50, 113-123, 2004.

4. 宮下保司第28回大会大会長より第28回日本神経科学学会大会の開催状況が報告された(第28回日本神経科学大会のご報告参照)。
5. 木村實第29回大会大会長より2006年7月19日～21日開催予定の準備状況について報告がなされた(Neuroscience2006第29回日本神経科学大会のご案内参照)。
6. 2007年の田中啓治第30回大会大会長より、準備状況について報告がなされた。日本神経化学会大会、日本神経回路学会と合同で行うことを予定。開催日は2007年9月9日から12日、横浜パシフィコ(会議センター全館＋展示ホールA)を仮予約した。シンポジウムおよび一般口演を9日(日)午後から、ポスターは10日朝から始め、12日夕方まで行う方向で検討を進めている。
7. 2008年第31回大会長は、慶應義塾大学　岡野栄之理事に決定した。
8. 2009年第32回大会長は 、生理学研究所　伊佐正理事に決定した。
9. 時実利彦記念賞の選考経過について宮下選考委員長より下記のごとく報告があった。
受賞者　祖父江　元博士　(名古屋大学神経内科教授)
受賞研究課題:「運動ニューロン疾患の病態解明と治療への新たな展開」
10. 第4回日本神経科学学会奨励賞の選考経過について岡部繁男選考委員長より報告がなされた。

総会に引き続き同会場において、時実利彦記念賞2005年度受賞者、日本神経科学学会奨励賞2005年度受賞者、2005 Travel Award 受賞者　の授賞式が行われた。(受賞者名、受賞課題名　は　神経科学ニュース2005年No3参照。)

動物の輸入届出制度について

厚生労働省は、輸入動物を原因とする人の感染症の発生を防ぐことを目的に、平成17年9月1日から「動物の輸入届出制度」を導入しました。これまで生きた齧歯目等は輸入時の検疫の対象ではありませんでしたが、この制度の導入により、動物の種類や数量を記載した届出書とそれらの動物の感染症に関する安全性を証明した輸出国政府機関発行の衛生証明書等を厚生労働省検疫所に提出することが求められます。なお、本制度の詳細は、以下の厚生労働省ホームページをご参照下さい。

・日本語版:http://www.mhlw.go.jp/topics/2004/10/tp1015-2.html
・英語版:http://www.mhlw.go.jp/english/topics/importanimal/index.html

日本神経科学学会は、本制度の導入が公表されて以来、海外からの実験動物の輸入に重大な支障の発生する可能性について懸念を表明してきまし

た。特に、本制度の問題点として、(1)「輸出国政府機関が動物の感染症に関する安全性を証明した衛生証明書を発行する」ことと、(2)「厚生労働大臣が定める基準を満たす齧歯目の保管施設を輸出国政府が指定する」ことが、実際の運用上極めて重大な問題となる可能性を指摘してきました。これらの問題への対応も含め、本制度の実験動物への適用について根本的な見直しを行なっていただけるように強く要望して参りました。国内の多くの学術団体等からも同様の要請をうけ、厚生労働省は、平成17年8月8日に「動物の輸入届出制度」を改正しました。改正法では、(2)の輸出国政府による齧歯目の保管施設の指定は、高度な衛生管理がされている齧歯目(一般の動物実験施設で飼育されているマウス、ラットなど)の場合、必要なくなりました。しかし、改正法においても、(1)の輸出国政府機関により発行された衛生証明書の提出が義務付けられます。

輸出国政府による衛生証明書の発行方法は国によって異なります。これまで、米国とは協議が進んでおり、輸出施設が厚生労働省の定める様式にそった衛生証明書を発行し、これを各州の動物輸出に係わる事務所に送るとUSDA(米国農務省)の獣医官が裏書承認(endorse)することになっているようです。一方、米国以外の国々(ヨーロッパ諸国を含む)とは、衛生証明書の発行方法について、まだ十分な合意がなされていないようです。今後、これらの国々と衛生証明書の発行方法について合意がなされるかどうかについては懸念がもたれます。もしこの合意がなされない場合には、個々の事例にあわせて、相手国政府による衛生証明書の発行方法を模索しなければいけなくなり、輸出者あるいは動物施設の方々に多大な努力をお願いすることになると思われます。

このような現状を把握し、今後、海外からの実験動物の輸入を計画される方は、輸出者および輸送・通関に係わる業者と綿密な連絡をとり、実験動物の輸入を円滑に行なうための手続きをご検討いただけますよう宜しくお願い申し上げます。また、これまでよりも手続きに時間がかかることは明確ですので、時間的余裕を持って手続きを進められますよう重ねてお願い申し上げます。

この内容にご質問のある方、あるいは具体的助言の必要な方は、日本神経科学学会動物実験・倫理委員会にお問い合わせください(照会先:福島県立医科大学・小林　和人、kazuto@fmu.ac.jp)。

動物実験・倫理委員会　委員長　伊佐　正

会員の皆様への重要なお願い：新しい会員データベース

現在、日本神経科学学会では、新しい会員データベースの作成とそれと連動したオンライン会員検索とメール配信システムを作成しております。つきましては、近日中に、先生の連絡先について確認するＥメール、あるいはＥメールを登録されていない先生にはFAXか電話を差し上げます。このシステムが、有効に活用できるかどうかは、皆様にかかっていますので、どうぞご協力宜しくお願いいたします。

1．オンライン会員検索システムとメール配信システムのメリット

このシステムを完成させることにより、次のメリットが期待されます。

1)学会や年次大会などの重要な情報を、速やかに学会事務局から各会員に連絡することができる。

2)自分の連絡先をいつでも自分で更新可能であるために、常に最新の会員情報を維持できる。

3)研究者の連絡先の情報(英文)を簡単に検索できることにより、国内・国際研究者の間での円滑な連絡・交流を推進する。これは、研究材料の交換や学術誌における論文査読候補者指名の際に役立つ。

4)将来的には、理事等の選挙もオンライン投票で行うことにより、学会における事務的・経済的負担を大幅に削減できる。

5)Neuroscience Research誌のTable of Contentsの配信が受けられる(配信しないオプションもあり)。

2．含まれる情報

データベースは、「非会員でも検索可能」という性質のため、セキュリティの観点から個人情報(自宅住所・自宅電話番号・個人用Ｅメールアドレス)は一切含まず、以下の情報でのみ構成します。

1)氏名

2)所属機関名

3)所属機関の住所・電話番号・FAX

4)所属機関における先生のＥメールアドレス

「上記の情報をオンラインに開示しない」というオプションをつけますので、オンラインでの検索を拒否される先生方も、是非情報登録だけは必ず

行ってください。特にＥメールアドレスは、今後会員専用ページに認証を受ける際に重要な情報となりますので、必ず登録してください。

ただし、1)－3)は既に公的に開示されている情報であり、4)についても、論文投稿時には開示されますで、基本的に公的な情報と考えられます。いわゆるスパムメールを気にされる先生方も居られると思いますが、スパムメールは電子メールソフト側で対応可能な問題であり、オンライン会員検索システムから得られるメリットの方がはるかに大きいのではないかと考えます。実際に、同様のシステムは既に北米神経科学学会では、オンライン投票も含めて実現されています。したがって、「開示しない」というオプションはつけますが、上記の情報についてはできる限り「開示」の方向でご検討下さい。

ただし、連絡先として自宅のみを登録されている先生については、個人情報保持の観点から、原則として非開示で結構です。しかし、その場合でも自宅Ｅメールアドレスを登録していただきませんと、学会からの連絡について不利益を生じる恐れがありますので宜しくお願いいたします。

日本神経科学学会　会長　津本忠治
ホームページ編集小委員会委員長　柚　通介

Neuroscience2005 第28回日本神経科学大会に参加して

群馬大学大学院医学系研究科
花村健次

2005年7月26日(火)-28日(木)にパシフィコ横浜で行われた第28回日本神経科学大会に参加しました。初日台風が近づいてきたことで、激しい風雨により国内外からの飛行機が無事に着くかどうか心配されており、どうなることかと思いましたが、無事スケジュールどおり進行できて良かったです。私はポスター発表でしたが、奇数偶数の討論時間が午前と午後に分かれていたこともあって、昨年に比べるとあまり混雑もなく余裕を持って説明できました。また、2日目3日目はすっかり晴上がり夏真っ盛りの天候で、暑くて喉が渇きましたが、ポスター会場でのドリンクサービスの水、コーヒーがいつまでも無くならなかったので助かりました。

シンポジウムなど発表は、大会CD-ROMから事前に興味ある演題をピックアップしてスケジュールを作成できたので、いつもよりは計画的に見て廻ることができました。シナプス形成についての話は私もポスターで紹介しましたが、例年通り活発な発表を聞くことが出来ました。また、私の所属している研究室でも遺伝子改変マウスが増えてきていることもあって、遺伝子変異に伴う行動異常についての話が特に印象に残りました。近年、様々な工夫がなされた動物が作られていますが、システマティックに行動解析されてきていることや、変わった解析として、複数の動物が存在する競争的な条件下ではじめて異常が見られる表現型が興味深かったです。また、以前からも行われていたのかも知れませんが、野生由来マウス系統や薬剤誘発突然変異系統の解析において、行動の違いに関わる遺伝子座の染色体上の位置が明らかとなりつつあるようで、今後の結果が楽しみです。

初日のプレナリーレクチャーでは、Fred H. Gage博士は、長年にわたって研究されている成体脳での神経新生についての話を展開され、豊かな環境で育った動物の海馬歯状回において新生した神経細胞の数が増加し、神経回路としても発火しやすくなることを示されました。さらに、この神経前駆細胞においてLINE-1と呼ばれる配列がゲノム内でレトロ転位することで、その分化に影響を与えることがあり、これがニューロンの体細胞多様性を生み出している可能性があるという話を紹介されました。レトロ転位は、これまで遺伝子の進化を引き起こすメカニズムと考えられてきていましたが、実際に脳内で働きうることが示されたことは画期的でありました。

今大会で力を入れていたことの一つとして、特に若手研究者の参加を呼びかけた懇親会、Neurosocial(写真)が企画されたことがあげられます。私も参加致しました。そこで、最初は頑張って初対面のアメリカ出身の人と英語で話していましたが、アルコールが廻ってくると私の英語力の無さから研究の話も、ちぐはぐになってきてしまいました。また、教授に紹介された先生や、先輩の知り合いの人とは話しましたが、なかなか新しい人と繋がりを持つのは難しく、ついつい知っている人と喋ってしまいましたが、次回はもっと積極的に話し掛けるようにしなければいけないと思

いました。会場の都合で実現が難しいかもしれませんが、自分自身を売り込みたい若手が、自由にポスターを貼れるスペースがあると、より気軽に年代を越えて話が弾むかもしれないと思いました。

次回の神経科学学会は京都ですが、私のいる群馬でも、来年の3月に生理学会が開催されます。多くの方が参加していただけるとありがたいです。

第28回日本神経科学大会見聞記

生理学研究所発達生理学研究系
生体恒常機能発達機構研究部門
北村明彦

台風7号の接近とともに始まった第28回日本神経科学大会。はじめに、特に印象の強かった発表を列挙する。まず、シンポジウムSY1-01の「神経回路の形成、発達、機能発現」において鳥取大学の畠義郎先生の発表で、臨界期の大脳皮質視覚野には外側膝状体からの軸索が競合なしに退縮する仕組みがあるという内容は、競合そのものを再考させられる非常に興味深い内容であった。次に、Harvard大学のJeff Lichtman先生によるプレナリーレクチャーでは、発達期における神経筋接合部の同一シナプスをin vivo imagingを用いて長期連続観察を行い、シナプス競合および余剰シナプスの除去について研究されている内容で、学会最終日の疲れが吹き飛ぶぐらい圧倒された。ポスター発表では、個人的な興味のせいもあるが、様々な分子がスパインの形成や形態に関与する演題が多く目についたように思う。今後はスパインの形成や形態が分子との関わりだけでなく、神経回路レベルや行動レベルに関連づけられて、演題が増えていくことを期待させた。

私は神経科学大会への参加は7回目となるが、今回、学会運営に関して改善されているなあと感じた点がいくつかあった。一つ目は、ポスタースペースの充実である。隣また向かいの演題との距離が気にならず、非常に快適に集中して閲覧できた。とはいえ、そのために展示スペースが広くなり、シンポジウムや口演会場から離れていたこともあって、あちこち歩き回ることとなった。また、ポスター会場にはフードコーナーが用意され、横浜らしく中華街の「招福門」というフカヒレ料理で有名な店が出店していた(私自身フカヒレラーメンとフカヒレ餃子を食した)。今までポスター会場に軽食でもあれば、食べながらいろいろと話ができるのにと思っていたので、それが実現されていたのは嬉しい限りであった。初日の晩に開催された「NEUROsocial」と題された懇親会についても、昨年までとは違ってドリンク中心で、参加費も抑えられ、非常に参加しやすい形であった。おかげで例年に比べて若手研究者の参加が多く見られ、交流が深められたこともよかったと思う。最後に、非常に印象に残ったのは、懇親会でのJeff Lichtman先生の挨拶だった。枝葉に迷い込んでいくような研究ではなく、ストレートに突き進むような研究を目指しなさいという若手研究者に対するメッセージは、神経科学分野の命題の一つである、シナプス競合および余剰シナプスの除去を長年にわたって研究されている先生らしいスピーチであった。このメッセージを今後の研究の励みにしたい。

Neuroscience 2005に学ぶ『神経科学研究と環境問題』

産業医科大学産業保健学部
第一生体情報学講座
笛田　由紀子

台風7号が関東沿岸に接近した7月26日、横浜パシフィコで第28回日本神経科学大会が3日間の会期で開幕しました。26日は雨と風で足元の悪い中にもかかわらず会場では立見がでるほどの盛会で

した。計3080名の参加者だったそうです。本学会は、1974年に会員約70名で創設された神経科学協会から年々大きくなり、2005年5月現在では4500名を超える会員数となったそうで、その発展には先輩諸先生方や多くの会員諸氏の研究成果が寄与しているものと思います。たえずより良い大会様式を考え続ける進歩的学会という印象です。学会という組織はある意味で生き物であり、存続には構成要素の多様性が重要なポイントになるかと思います。その点、本学会がカバーする領域はきわめて広く、HPによれば、分子生物学、細胞生物学、生物物理学、解剖学、生理学、生化学、薬理学から、心理学、行動科学、工学や数学さらには臨床医学までであるそうです。神経科学という共通のキーワードを軸に多様な分野での情報交換が行われるから新しいものが生まれてきたのだと思います。学会の印象記のご依頼をいただきましたが、これほど多くの多様な領域にわたる学会の印象を書くのは容易ではありませんので、私の専門分野からみた印象記を書かせていただくことになりました。内容が環境化学物質の生体への影響の研究に特化しておりますがご容赦いただければと思います。

科学は社会の変化と無関係ではなく、社会の要請に応えるかたちで始まった研究から新しい流れが生まれるときがあります。環境化学物質の生体影響がクローズアップされた『外因性内分泌攪乱物質による生殖への影響』はその一例だと思います。当初、生殖器への影響から次世代にかかわる環境問題と重視され、時限付きで文部省科学研究助成金の独立領域がつくられたのはご存知のとおりであります。多くの研究成果が集積されてきた今日、この環境ホルモンの問題は神経内分泌学分野に新しい展開をもたらしているようです。川戸佳先生と井ノ口馨先生が座長をされた初日のシンポジウム『神経シナプス可塑性を変化させる脳内性ホルモンと環境ホルモン』ではまさにその展開の最新情報を提供されたものと興味深く拝聴しました。川戸先生はくしくも『神経内分泌学の革新』と副題をおかれています。講演に取り上げられていた環境汚染物質トリブチルスズは、魚網や船舶への貝付着防止剤、工業製品の中間体・添加剤として用いられていたのですが、内分泌攪乱作用が懸念されて使用禁止となっている物質です。しかし海底堆積物には沈殿したトリブチルスズが含まれているのではないかという懸念もあり、魚介類への影響だけでなく食物連鎖で魚介類に蓄積された化学物質が海産物を多く摂取する日本人の健康に影響するのかしないのか等々明らかにされていないというわけです。山崎岳先生のグループのご報告はこのトリブチルスズが海馬のエストロゲン合成や受容体量に影響するという内容でした。何らかの経路でトリブチルスズが中枢神経系に到達すれば量によっては機能への影響があるかもしれないと考えられるものでした。また、PCBは絶縁物質としてかつて使われていた物質です。鯉淵典之先生のグループからはPCBの膜への非特異的作用と遺伝子発現への作用についてご報告があり、環境化学物質の神経細胞への作用部位の複数経路が示されました。一般・ポスター演題にも、ダイオキシンやビスフェノールAの胎児曝露実験によって次世代の仔ラットの脳への影響を示す証拠が報告され関心の高さがうかがえました。このような研究室での結果とフィールドワークの結果との間に相互のコミュニケーションが必要なのはいうまでもないことです。実は、このような化学物質を実験室で使用する場合、飲み水で与えるにしても混餌で与えるにしても実験者への曝露防護と同時に動物の糞尿の廃棄方法も管理されていなければなりません。さらに常温でガス状の化学物質についてはガスの導入経路や実験室そのものの空調が厳格に管理されなければならず、設備・管理等に経費がかさむというのが現状かと思います。この領域で実験をしておられる研究者には抄録や論文では書きつくせない環境への配慮が課せられていることを、このシンポジウムに参加された方やポスター等をご覧になった方はお気づきになられたでしょうか。環境ホルモンに限らず、環境化学物質による影響評価は労働衛生学上重要な問題であり、厚生労働省の『21世紀の労働衛生重要課題』のなかに含まれています。新規化学物質や有害性化学物質を扱う労働者の健康への影響が懸念されています。いずれの曝露においても中枢神経系への影響も無視できないと考えられています。研究者は実験対象と客観的に対峙する訓練を受けますが、化学物質に関しては実験動物にとどまらず自分自身が対象となりうるため他人事ではないのです。また、住宅の気密性・住宅材料の変化による一般住宅の室内空気質の健康影響も社会問題となっています。極端な言い方になるかもしれませんが、我々自身が環境化学物質の低濃度曝露を一生うけており、さらに職業性曝露よって混合曝露をされている状態にあるといえるかもしれません。学会員のみなさんのラボで有機溶剤は臭っていませんか。喫煙習慣のあるヒトは理論上複合曝露されていることになります。

さて、PRTR法が実施されて、研究室でも例外なく対象化学物質の管理・廃棄の記録が義務づけられています。現在のところは大量に使用されている化学物質に関しての環境中放出を管理するもので、申告された廃棄量によって環境中(大気・河川など)の曝露量をシュミレーションできるシステムになっています。21世紀の研究者は研究室内の実験にとどまらず、研究者自身が環境を汚染しないことを自覚する必要がありそうです。化学物質の環境中許容濃度は適宜見直されていて、そのときに、実際の曝露評価と化学物質の有害性評価が議論されるわけです。しかしながら、作業環境・一般環境中にある揮発性化学物質の中枢神経系への影響評価は難しいものです。その有害性評価について神経科学によるメカニズムベースの評価を導入したいというのが産業医科大学研究プロジェクト*メンバーとしての私の目標であります。その意味で日本神経科学大会はまさに情報の宝庫といえるかもしれません。化学物質の曝露量については今までは法律の規制さえ守っていればよかったのですが、今後段階的に企業体自ら有害性をふまえて使用現場での曝露量や使用後の廃棄方法を管理していかなくてはならない時代がくるでしょう。また、大学・研究所が独立行政法人化しましたのでラボでの管理も必要となるでしょう。ラボで実験する一人ひとりが化学物質と地球環境問題を考える時代となりつつあるのを実感させられた学会でありました**。

*ガス状化学物質の生体影響を研究する『ジーメイトプロジェクト』と化学物質の胎児曝露影響を研究する『ゆりかごプロジェクト』
**化学物質の評価と管理について本邦と世界的動向に関する最新情報をシステマテイックに知りたい方には、お茶の水女子大学ライフワールドウオッチセンター(LWWC)主催で開催されている公開講座『化学・生物総合管理の再教育講座』(全56科目)の聴講(平成17年度現在無料)をお勧めします。化学物質の有害性評価のあり方からリスクコミュニケーションまで幅広い科目で構成されていて公開講座とは思えない充実した内容です。

第28回神経科学大会 託児室を利用して

東京都神経科学総合研究所・
統合生理　塚元　葉子

この度、神経科学大会の託児室を利用させていただきましたので、感想をご報告申し上げます。我が家は孤立無援の核家族で、近所に実家など融通のきく子育て支援部隊がいるわけでもなく、子供たちの通う保育園や学童クラブだけが共働きを支えてくれる手段、という綱渡り的な毎日を送っています。特に、この日だけは絶対はずせない！という日、たとえば学会発表当日や約束のある日に限って、なにか障害が発生するのが常となっております。案の定、今回も7月半ばを過ぎてから、大事な大事な私の発表当日(大会第1日目)に主人の大阪への出張が入ってしまいました。2005年のカレンダーを部屋にかけると同時に神経科学大会期間を赤い線で囲み、発表日が決まるとすぐに大きく「発表日！！」と書き込み、「横浜は遠いので、この期間は保育園の送迎は時間的に無理です。パパよろしくお願いします。頼むから出張や夜遅いミーティングは入れないでね。」とメッセージを送り続けてきたのですが、先方様の都合ではいたし方ありません。

さて困った、どうしよう、と、大会ホームページを開いてみますと、「託児室・親子休憩室」の文字が救いの神のように見えて参りました。申し込み期限が過ぎていたらどうしよう、と不安に思いながら調べますと、なんと有難いことに締め切りまでには数日の猶予がありました。さっそくピジョンハーツさんに電話連絡を入れ、4歳の息子を預かっていただけることとなりました。(上の娘は小学3年生なので、一人で頑張ってもらうことにしました。)1－2日後にはピジョンハーツさんから書類が届き、これで準備OKと安心しました。

当日は、台風が関東地方を直撃という子連れの旅にうれしいお天気でしたが、おやつや着替えの入ったリュックを息子に背負わせ、横殴りの雨の中タクシーとラッシュの電車を乗り継いで横浜みなとみらい駅にたどり着きました。託児室は、口演会場に近いけれど静かな場所に設定されており、広い部屋の中にはマットや遊具やプラレールなどのおもちゃが用意されていました。それを見

た息子の目はとたんに輝きはじめ、嬉々として託児室に入っていくと、「バイバーイ、ママ、もう行っていいよー。」と手を振って上機嫌。私も必要書類を保育士さんにお渡しし、昼食は息子と一緒に外で食べたいので迎えに来る旨お伝えして、ポスター会場へと向かいました。

ポスター説明も無事終えて昼食時に迎えに行った時は、息子は数人のお友達と楽しそうに遊んでいました。昼食後は、たまたまポスター会場の隣で開かれていた「恐竜展」を楽しみ、託児室に帰った時には他のお友達はみんなお昼寝の真っ最中でした。ただ一人、目がギンギンに冴えている息子だけ別の場所でお相手をしてくださったようです。用意していったおやつも時間を見計らって食べさせてもらったようで、名古屋大会のときも利用して感じたことですが、安心してお願い出来る託児スタッフを選定して下さっていることに感謝しております。帰り際、「あしたもここにくるー。また、ウルトラマンごっこしてあそぶー。」と、息子は託児室とお友達をたいそう気に入ってしまい、明日は来ない、ことを納得させるのに一苦労でした。

子育てしながらなんとか研究にしがみついている身としては、このような学会の託児室は大変ありがたく、不可欠の存在です。お蔭様で今年も無事にポスター発表を行うことが出来、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。一時間400円という料金は一般の託児料金と比べて破格であり、大きな援助をいただいているからこそと深く感謝いたします。ありがとうございました。今回私は利用しませんでしたが、親子休憩室もまた、特に小さな年齢のお子様をお連れの方には必要なものと思います。託児室や親子休憩室の利用者はそれほど多くないのかもしれませんが、育児と研究を両立するかどうか迷われるこれからの若い方々、特に女性研究者にとって、大きな心の支えとなることは間違いありません。是非、今後とも、学会における子育て支援を継続・発展させていただけますよう、心からお願い申し上げます。

生理研研究会「脳神経科学・精神医学の主要ツールとしての遺伝子改変マウスの表現型解析」に参加して

児島伸彦
群馬大学大学院医学系研究科
高次細胞機能学

6/30午後から7/1午前までという日程で生理研研究会「脳神経科学・精神医学の主要ツールとしての遺伝子改変マウスの表現型解析」(提案代表者:京都大　宮川剛先生、所内世話人:池中一裕先生)に参加した。開催会場は数年前に完成した山手地区の建物で、うかつにも明大寺地区の方へ行ってしまった筆者は、徒歩で20分ほどかかる道程を蒸し暑い梅雨空の下汗まみれになりながら会場に向かうこととなった。幸い時間的には余裕を持ってきたので午後1時の開始時間には間にあうことができた。

さて、この研究会の趣旨を一言で言えばノックアウトマウスの表現型解析を効率よく推進するための組織づくりを考える、というものである。ヒトやマウスで全遺伝子の塩基配列が解明され、ポストゲノム時代として次には個々の遺伝子の機能の解明に重点が置かれることになる。マウスのほとんどすべての遺伝子のホモログはヒトにも存在しており、遺伝子を容易に改変できるマウスを使った研究は極めて有意義であるという立場から、アメリカやヨーロッパ諸国では既にすべてのマウス遺伝子を系統的にノックアウトすることを目的としたプロジェクトが国家規模で立ち上がっている(Austin et al., The Knockout Mouse Project. Nat. Genet. 36, 921-924, 2004, Auwerx et al., The European dimension for the mouse genome mutagenesis program. Nat. Genet. 36, 925-927, 2004)。一方、国内においても遺伝子改変動物は一般の研究室で広く研究対象として取り扱われているものの、研究室間の連携や得られたデータの共有などがほとんどできていないのが実情である。ノックアウトマウス研究のラージスケール化、データベース化が始まっている海外の動きをふまえて今後どのような方向で研究を進めるべきかを話し合うことを目的として本研究会が企画提案された。本稿では参加者の一人としてどのような研究会であったかについて感想も交えな

がら振り返ってみたい。

提案代表者の宮川先生は、ボストンMIT学習記憶センターから昨年3月に帰国され、現在京都大で動物行動解析を中心とする研究を行っている。宮川研究室では現状で年間最大40系統の解析が可能だということであり、国内でのマウス行動解析の最大拠点のひとつとなっているが、かりに脳で発現している遺伝子の数を10,000種と見積もると、この研究室ですべての遺伝子ノックアウトマウスの解析を終えるのに250年もかかることになってしまう。さらに、行動レベルでの表現型の検出そのものはゴールというよりもむしろ脳での遺伝子機能の解析の出発点に過ぎない。そこで本研究会のテーマである表現型解析の組織化(コンソーシアム化)という構想が生まれた。

宮川先生らの構想によれば、「表現型解析センター」を設立し、まずそこで遺伝子改変マウスの基本的表現型を網羅的にスクリーニングする(第一段階)。それによって何らかの表現型が検出されたら次には個々の研究室か、あるいは専門技術を持った「コアラボラトリー」で詳細な解析を行う(第二段階)。コアラボは複数の研究室で構成され、神経科学、精神医学の様々な実験技術(たとえば、スライス標本やin vivoの電気生理学的解析、脳の組織学的解析、神経細胞の初代培養、伝達物質の定量解析やタンパク質のリン酸化などの生化学的解析、精神疾患の遺伝学的解析など)に対応する。これに加えて「マウスリソースセンター」との連携も重要となる。そこでは、胚操作や繁殖維持などの技術提供や得られた研究データの収集と管理業務を行う。このコンソーシアム構想が実現すれば、様々な遺伝子改変マウスに対する表現型の一次スクリーニングが効率よく行われ、結果が迅速に得られることが期待される。これは予算効率、研究機器の回転効率の面において有利であり、またデータの共有とその比較検討が可能になるという効果を生む。さらにコアラボとの連携によって高度に専門化された実験にスムーズに移行することが可能となる。このようにいいとこ尽くめの構想に思えるのであるが、センターとコアラボを実際に組織化し運営する上では難しい問題もあろう。そのような問題点を討議するための本研究会では、まず国内での「マウスリエゾン」というワークグループについてのこれまでの経緯と現状についての説明(神戸大　饗場篤先生)、それに続いて個別の研究の立場から遺伝子改変マウス研究の実際の紹介、次いでプロトコル標準化とコアラボの可能性について専門技術を持ち将来コアラボの候補となる研究室からの提言があった。さらにマウスを使った研究とヒト研究との融合はどのように可能かについての現状報告があり、最後に総合討論でコンソーシアム化についての諸問題が議論された。

(1)「マウスリエゾン」というワーキンググループは東京大の三品昌美先生の呼びかけによって結成されたもので、ポストゲノムシークエンス時代の中心的な研究は個体レベルでの遺伝子機能研究であることをふまえ、個々の研究者の創意工夫を活かし、かつ個々の研究室単独の力では困難な「高等動物をシステムとして統合的に理解する」ことを目的とし、緩やかな連合体を組織することを目指している。具体的には、遺伝子改変マウス作製、表現型解析、リソース化・データベース化の三本柱からなっており、このうちの表現型解析の部分の原案作製を宮川先生が担当されている。この生理研研究会での提案内容もそこでの議論をふまえたものになっているとのことである。

(2)個別研究の立場から筆者も含めていくつかの個別研究室が特定分子の遺伝子改変マウスを用いた研究の紹介とコアラボに対する意見や要望などを述べた。Sept4遺伝子(京都大　木下専先生)、インプリンティング遺伝子Peg1/Mest(東京医科歯科大　石野史敏先生)、スパイン内RNA結合タンパク質TLS(大阪バイオサイエンス　内匠透先生)、そしてスパイン内アクチン結合タンパク質drebrin A(筆者)である。紙面の関係で個々の内容は割愛させていただくが、いずれの例でも遺伝子改変動物の網羅的な表現型解析がこれらの分子の生体での機能を包括的に理解する上で重要である事が示されていた。

(3)プロトコル標準化とコアラボの可能性について、幅広いニーズのある専門的な実験手技を確立し将来のコアラボラトリーの候補研究室からの報告があった。カテコールアミン類の定量的解析(東京工業大 一瀬宏先生)、DARPP-32のリン酸化を指標とした線条体ドパミン代謝の解析(久留米大 西昭徳先生)といった生化学的研究を行っている研究室と海馬および扁桃体(東京大　真鍋俊也先生)、小脳(金沢大 平井宏和先生)の電気生理学的解析を行っている研究室である。一つの手法にコアラボが複数存在するときには各コアラボ間でプロトコルの標準化は必要になってくるであろうが、ここではそのような議論はあまり出ず、むしろコアラボ運営の難しさが問題として提起された。メインワークの他に共同研究としてのルーチ

ンワークをこなすための時間と人そして予算といった点である。いずれの実験技術の習得もそれほど容易くはない事が強調され、「電気生理のコアラボは無理。」との極論まで出た。基本的な素養もさることながら一通りこれらの技術ができるようになるまで長期間かかる(スライス標本の電気生理では5年！)となると、将来の表現型解析センターで同じ装置を何十台も並べてそれぞれに技術者が貼付いてLTP実験をハイスループットに行うシステムが構築できるまでには相当の時間と労力がかかりそうだ。また、コアラボとして共同研究を円滑に行うためには、単にデータを出すだけの関与ではなくコアラボ側にもそれなりのメリットがないと現実問題として難しい。たとえばその見返りとして別枠での研究支援(研究費補助、研究補助員雇用、設備の充足など)があるならば、コアラボとして名乗りを上げる研究室も増えることが期待できよう。

(4)遺伝子改変マウスの解析で得られた知見は最終的にはヒトの脳機能の解明や疾患の予防と治療に役立てなければならない。ヒトの精神疾患(統合失調症、鬱病など)のモデルとしてノックアウトマウスを解析する方向の研究も近年盛んになってきている。強制水泳テストは古くからヒトの鬱病モデルとして抗鬱薬のスクリーニングに用いられているが、最近では驚愕反射のプレパルス抑制(PPI)が統合失調症で障害されるとの知見から様々な遺伝子改変マウスでテストされている。しかしながら、その脳内メカニズムや統合失調症との相関については依然不明確であり(国立精神・神経センター　功刀浩先生)、単純にPPIの障害＝統合失調症モデルとはいかないようだ。

精神疾患の診断が難しい点は明確なバイオマーカーがないことである。しかし遺伝子改変マウスでの遺伝子発現と同様の発現パターンを示すヒト脳のジーンチップ解析データをバイオインフォマティクス的に検索するという試みもなされており(三菱ウェルファーマ　梶井靖先生)、精神疾患の病態の分子メカニズムの解明、さらには創薬などといった展開が期待される。

マウスを使った研究をヒト研究に発展させるためにはヒトの死後脳を使った研究も重要となる。しかしながら現在病院、大学、研究所などで個別に管理されている死後脳を有効利用するためのネットワークづくりについてはまだあまり進んでいないのが現状のようだ(福島県立医大　池本桂子先生)。これに関して文科省科学研究費特定領域研究「総合脳」での取り組みに引き続いて今後もネットワーク実現に向けて予算が確保されることが重要であるとの濱清先生のコメントがあった。

マウス表現型解析のコンソーシアム構想では、遺伝子改変マウス個体やその解析データバンクの管理と提供も欠かせない。理研バイオリソースセンター(BRC)はすでにそのような活動を開始している。これまでに国内で作成され寄託された遺伝子改変マウス(現在1500系統あまり)の管理(吉木淳先生)およびデータベースの構築を行っている(深海薫先生)。これに加え、今後は脳研究のツールとなるマウス(たとえば、各種の部位特異的Cre発現マウスや、特定の細胞に蛍光タンパク質を発現するマウスなど)の収集も行うことを検討しているとのことである。ここで飼育管理されているマウス系統はリクエストすると一定の条件で配布を受けることができる。通常大学などの飼育施設ではスペースの関係でマウスの飼育数を増やすことが難しく、また飼育管理にかかる労力、費用も馬鹿にならない。理研BRCは今後の共有マウスのプラットホームとして将来非常に有意義な施設となるだろう。また、理研ゲノム総合科学センターではENUによる点突然変異マウスを大規模に開発しており(若菜茂晴先生)今後これら突然変異マウスがヒトの疾患モデルマウスとして有効に利用されることが期待される。

おわりに、この研究会ではポストゲノム、リエゾン、コンソーシアム、コアラボラトリー、フェノームプロジェクト、ラージスケール、ハイスループットなど様々なキーワードが終始飛びかったのが印象深い。この研究会の中だけではとても解決しない問題が多々あることが浮き彫りにされたが、ポストゲノムの研究体制としては、これまで個々の研究室に分散して行われてきた遺伝子改変マウスの表現型解析をより効率よく推進し、得られたデータを統合しデータベース化していくこ

とが重要であることはまちがいない。限られた予算、研究時間、人員の中でわれわれがまずできることは研究室どうしの緩いつながりからとりあえず出発することと貴重な時間を割いてでもコアラボとして技術提供しようという意識を持つことが必要であることを痛感し、岡崎の地を後にした。

特定領域研究「統合脳」ワークショップ・サテライトシンポジウム・合同班会議に参加して(1)
"松代の熱い四日間"

東京大学　医学系研究科
河崎洋志

8月18日より4日間にわたり、特定領域研究「統合脳」のワークショップ、合同班会議およびサテライトシンポジウムが開催されました。会場は初日より満員となり、班員のみならず大学院生やポスドクも多く参加するなど、神経科学研究のactivityの高さを反映する盛況振りでした。開始に先立ち、総括班代表・丹治順先生より「統合脳」の目指す方向性が明確に示されました。即ち、1)分子レベルからシステムレベルまで、また、基礎神経科学から病態解明までの幅広い神経科学研究のバランスの取れた進展、2)これら多岐に渡る研究者間の相互理解および共同研究の促進、です。これらを通じて「統合的」な脳機能理解および社会貢献を目指すという明確なコンセプトが提示されました。

このコンセプトに基き、4日間のプログラムが構成されていたように感じました。サテライトシンポジウム1は「脳科学研究におけるイメージング」がテーマで、近年、発展が著しいイメージング技術の最先端が紹介されました。分子レベルでのタンパク活性の可視化、神経細胞活動の可視化、さらには個体レベルでの可視化技術の応用などレベル横断的な内容でした。サテライトシンポジウム2「The Frontier of Learning and Memory Research」、ワークショップ「Integrative Research for Understanding Brain Functions」では、記憶・学習や情報処理の神経基盤について、神経細胞・神経回路・個体行動などの様々な角度から探究する先駆的研究結果が、国内外の研究者により紹介されました。いずれの発表に対しても、様々な分野の研究者による積極的な議論がなされ、分野間の相互理解が促進されたように感じました。

広範囲に渡る先駆的研究成果で視野を広げることができた一方で、領域毎の班会議ではより専門領域に近い発表に対して深く踏み込んだ討議がなされました。私が参加させて頂いた第3・4領域合同班会議では、朝8時30分から午後10時近くまで計40人近くの発表がありました。長時間に渡る班会議にもかかわらず、大変におもしろい発表の連続に、最後まで熱い議論が繰り広げられていました。

語り尽くせぬ議論は夜にまで持ち越され、くつろいだ雰囲気でビールを片手に続けられていたようです。私も面識のなかった先生方との交流を深めることができました。また共同研究につながる信頼関係はもちろんのこと、ふとした疑問を気軽に相談できる人間関係が作られていく雰囲気を感じました。このように私にとってこの4日間は、とても有意義であるとともに楽しい4日間でした。このような機会を作ってくださった「統合脳」のスタッフの諸先生方に厚く御礼を申し上げたいと思います。

INFORMATION

シンポジウム・研究会

Brain IT 2005へのお誘い

平成17年10月7日～9日に、北九州学術研究都市(北九州市若松区ひびきの)において、新しい学問分野「脳情報工学」に関する第2回国際会議、 Brain IT 2005 、を開催いたします。脳科学から情報工学、ロボティクスの最前線の研究にたずさわっておられる多くの研究者の方のご参加をお願いいたします。
会議では、一般講演と招待講演に加え、スペシャルセッション“Decision and Behavioral Choice Organized by Natural and Artificial Brain" を設け、この分野で、顕著な業績をあげておられる国内外の研究者をお迎えします。動物とロボットが行う意思決定と行動発現のメカニズムについて議論し、新しい脳型情報処理機械のあるべき姿やその情報処理原理について皆さんと一緒に考えてみたいと思います。
この会議は，九州工業大学の21世紀ＣＯＥプログラム「生物とロボットが織りなす脳情報工学の世界」が全面的に支援する国際会議ですので、論文投稿料および参加登録料は無料です．また、会議終了後、優れた論文を集めた本をエルゼビア社から出版いたします．是非多くの方々にご参加いただき、近未来の脳情報工学について大いに議論していただきたいと存じます．

招待講演者と講演タイトル

Edmund T. Rolls (Oxford University, UK)
“Decision making and emotion"

Rolf Pfeifer (University of Zurich, Switzerland)
“Morphological computation: **connecting brain, body, and environment**"

Mandyam V. Srinivasan (Australian National University, Australia)
“Small Brains, Smart Computations: **Vision, navigation and "cognition" in honeybees, and applications to robotics**"

Kenji Doya (Okinawa Institute of Science and Technology, Japan)
“Mechanisms and Origins of Reward-based Behaviors: **Neurobiological and Robotic Approaches**"

Joshua I. Gold (University of Pennsylvania, USA)
“**Neural mechanisms of learning a perceptual decision**"

Shu-Rong Wang (Institute of Biophysics, Chinese Academy of Sciences, China)
“**Neuronal mechanisms and circuitry underlying visual acceleration detection and saccadic suppression in birds**"

Walter J. Freeman (University of California, Berkeley, USA)
“Design and education of an intentional device to instantiate machine intelligen**ce**"

Andreas Konig (Techinische University Kaiserslautern, Germany)
“**Dynamically Reconfigurable Mixed-Signal Electronics for Adaptive Sensing in Organic Computing Systems**"

Samuel Kaski (Helsinki University of Technology, Finland)
“Proactive information re**trieval by monitoring eye movements**"

BrainIT 2005に関する詳しい情報については、下記のホームページをご覧下さい。

http://conf.lsse.kyutech.ac.jp/~brain-it/

BrainIT 2005広報担当
九州工業大学大学院
生命体工学研究科脳情報専攻
中川秀樹、古川徹生

男女共同参画学協会連絡会・第三回シンポジウム

主催:男女共同参画学協会連絡会
日時:2005年10月7日(金)
場所:お茶の水女子大学・理学部3号館
テーマ:21世紀の産業を拓く男女共同参画社会
資料費:1,000円(学生200円)
定　員:200名、事前にお申込ください。当日参加も歓迎します。

分科会(午前)
A　産業界における女性の研究者・技術者を増やすために
B　女性研究者を増やすために"女性比率からわかること"
ポスター展示:各学協会の取り組み

全体会(午後)
特別講演
　長沼雅子氏(資生堂)「働き続けられる職場から、ともに働きやすい職場へ」
　塩満典子氏(内閣府男女共同参画局)「科学技術分野における男女共同参画～行政の立場から」
パネル討論「産・官・学・男・女"真の共同参画社会を目指して」
　(司会)井上祥平(東京理科大学)(パネリスト)淺川智恵子氏(日本IBM)　辻篤子氏(朝日新聞)舘かおる氏(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター)
連絡会活動報告　など

懇親会　18時より(会費2,000円)詳細はホームページhttp://annex.jsap.or.jp/renrakukai/index.htmlをご覧下さい。

神奈川科学技術アカデミー教育講座　平成17年度第III期受講生募集
基礎から学ぶ分子細胞生物学コース～細胞の分子構造機能から病態まで

■カリキュラム編成者　東京大学医科学研究所
　教授　理学博士　中村　義一
　教授　医学博士　渡辺すみ子
■コースの特色・ねらい
ＩＴ関連、キャピタル、商社、保険会社といった様々な企業の方々で、これからライフサイエンス分野に参入しようとしている方を対象に、生命の成り立ちと営みを細胞レベルにおいて総合的に理解し、生化学・分子生物学から病気の基礎知識までを短期間で身に付けられるカリキュラムです。
■講義日　プレコース･･･ 10/12
本コース･･･　10/17　10/21　10/24　11/1
計4日間　　合計5日間
■主なカリキュラム内容
[プレコース]遺伝子とゲノム(ゲノム、複製、組換え、翻訳)/遺伝子から細胞へ(形態学)/細胞から個体へ(発生学)
[本コース]
細胞の分子構造と機能(機能分子としてのタンパク質)/幹細胞と組織発生(組織再生医工学)/発生から再生へ(生物とは何か)/システム情報ＩＩ(遺伝とゲノム、遺伝子から病理へ、シグナル伝達)/細胞ネットワークＩＩ(神経システムとその制御、免疫ネットワーク)/東京大学医科学研究所見学/先天性代謝異常(遺伝子病)/疾患とその治療(生活習慣病)/先端医療と社会と世界
■開催場所　東京大学医科学研究所(東京都港区白金台)
■受講料

区　分	一　般	ＫＡＳＴ法人賛助会員/神奈川県内中小企業
全日程［プレコース＋本コース］	65,000円	52,000円
本コースのみ	55,000円	44,000円
1日単位受講	18,000円/日	

■募集人員　30名
＊1日単位の受講は応募者数が定員を超えた場合、全コース受講される方を優先し選考します。
＊やむを得ない事情により、日程・内容等の変更をする場合があります。
＊受講料の中には消費税が含まれています。
＊KAST法人賛助会員は、登録されている事業所単位です。
＊神奈川県内中小企業とは、本社または事業所が神奈川県内にあり、資本金が3億円以下または企業全体の従業員が300人以下である企業をさします。

問い合わせ先:
財団法人 神奈川科学技術アカデミー　教育情報センター教育研修グループ
〒213-0012　神奈川県川崎市高津区坂戸3-2-1　KSP東棟1階
Tel 044(819)2033　Fax 044(819)2097　E-mail: ed@newkast.or.jp
http://www.newkast.or.jp

大阪大学蛋白質研究所セミナー「脳神経疾患研究の最前線」

URL: http://www.protein.osaka-u.ac.jp/regulation

【日時】平成17年11月24日(木)～25日(金)
【場所】大阪大学蛋白質研究所・1階講堂
(阪急北千里駅下車徒歩15分，北大阪急行千里中央駅下車タクシー15分，大阪モノレール阪大病院前下車徒歩15分)

【プログラム】
11月24日(木)　13:00～18:00
「神経変性疾患の発症におけるVCP蛋白質の役割」
垣塚　彰(京大院・生命科学)
「神経軸索ガイダンスの分子機構とポリグルタミン病」
柳　茂(東薬大・生命科学)
「ポリグルタミン病の分子病態」
貫名　信行(理研・脳科総研センター)
「ポリグルタミン病における神経細胞変性機構」
辻　省次(東大院・医)
「第16番染色体に連鎖する新しい脊髄小脳失調症の分子病態」
水澤　英洋(東医歯大院・医歯)
「アルツハイマー病の分子病態」
岩坪　威(東大院・薬)
「筋萎縮性側索硬化症とAMPA受容体RNA editing異常」
郭　伸(東大院・医)
「運動ニューロン疾患の分子標的治療をめざして」
祖父江　元(名大院・医)

11月25日(金)　9:00～12:00
「ゲノムインプリンティング疾患Prader-Willi症候群の発症機構」
吉川　和明(阪大・蛋白研)
「軸索保護による神経変性疾患の治療を目指して」
荒木　敏之(国立精神神経センター・神経研)
「家族性パーキンソン病発症の分子機構」
高橋　良輔(京大院・医)
「神経変性と脱ユビキチン化酵素」
和田　圭司(国立精神神経センター・神経研)
「神経変性シグナルの遺伝的制御機構」
三浦　正幸(東大院・薬)

[参加費・申込]　　不要
[世話人]　高橋　良輔(京大院・医)、吉川　和明(阪大・蛋白研)
[連絡先]　〒565-0871　大阪府吹田市山田丘3-2　大阪大学蛋白質研究所
吉川 和明
Tel. 06-6879-8621　Fax. 06-6879-8623

研究助成

内藤記念科学振興賞

[趣旨]

人類の健康の増進に寄与する自然科学の基礎的領域における進歩発展に顕著な功績のあった研究者に対してほう賞を授与するものである。

[候補者資格]

1. 人類の健康の増進に寄与する自然科学の基礎的研究において独創的テーマに取り組み、進歩発展に顕著な功績を上げた研究者。
2. 候補者は単独とするが、異なる研究グループによる共同研究の場合には、連名であっても良い。
3. 候補者の再度の推薦は差支えない。
4. 褒賞:正賞　金メダル　副賞　500万円

資料請求／問合せ先

(財)内藤記念科学振興財団
〒103-0033 東京都文京区本郷3-42-6 NKDビル8F
TEL.03-3813-3005 FAX.03-3811-2917
http://www.naito-f.or.jp/
E-mail info@naito-f.or.jp

;本学会は(財)内藤記念科学振興財団より「内藤記念科学振興賞」の推薦を依頼されています。
希望される会員は2005年9月26日までに学会事務局(送付先　〒113-0033　本郷四郵便局留め　日本神経科学学会　山根 慶子)に所定の用紙に必要事項を記入してお送りください(本学会からの推薦は1件とします)。

2006年度 女性科学者に明るい未来をの会「猿橋賞」候補者募集

女性科学者に明るい未来をの会より、「猿橋賞」候補者の推薦を依頼します。下記の要領で応募して下さい。募集内容、応募用紙などは各学会事務局に送付してありますが、電子メールでお申出頂ければ、様式を添付ファイルでお送りします。また、http://www.saruhashi.net/からもダウンロードできます。

1)対　象:推薦締切日に50才未満で、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者
2)表彰内容:賞状、副賞として賞金30万円、毎年1件(1名)
3)締切日:2005年11月30日
4)応募方法:所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(８00字程度)、略歴、推薦者(個人・団体)、及び主な業績リストを記入して、主な論文別刷10編程度(2部ずつ、コピーも可)を添え、5)の送付先までお送り下さい。
5)推薦書類送付先:
〒100-0005 千代田区丸の内１－４－３
UFJ信託銀行リテール総括部
女性自然科学者研究支援基金　江川康治
(封筒には、「猿橋賞推薦書類」と明記して下さい。書類は、猿橋賞選考のために選考委員会などで用いられます。書類は返却いたしませんのでご了承下さい)
6)問合せ先:saruhashi2005@saruhashi.net

※　本学会は「女性科学者に明るい未来をの会」より「猿橋賞」の推薦を依頼されています。
希望される会員は2005年10月30日までに学会事務局(送付先　〒113-0033　本郷四郵便局留め　日本神経科学学会　山根 慶子)に所定の用紙に必要事項を記入してお送りください(本学会からの推薦は1件とします)。

公　　募

非常勤流動研究員の募集

東京都神経科学総合研究所、病態代謝化学研究部門（http://tmin.ac.jp)では、神経変性疾患のメカニズムや治療に関する基礎的研究を一緒にして戴ける非常勤流動研究員１名を下記のとおり募集します。

1. 募集人員　　１名
2. 応募資格　　大学院博士課程修了又はこれと同等以上の研究歴を有する人
3. 任期　月18日、原則３年　（1年毎の更新制度）
4. 給料　財団の規程によります。(詳細は庶務係で聞いてください。)
5. 研究内容

昨年10月にオープンした我々の研究室は、当面の課題の一つとして、beta－synucleinの神経保護作用に焦点を当てております。パーキンソン病をはじめ、ルイ小体形成を伴う一連の神経変性疾患において、alpha－synucleinの凝集が病因に中心的役割を演じています。我々は、beta－synucleinがalpha－synucleinの凝集を抑制し、神経保護的に作用しているのではないかという仮説を提唱してきました。引き続き、この仮説をサポートする興味深い結果を得ており、beta－synucleinの神経保護作用を増強することが、治療戦略上、有効であると確信しています。他方では、beta－synucleinの神経保護作用の低下が神経変性の進行に関与する可能性もあります。これらの重要課題に対して試験管モデル、細胞培養、及び、トランスジエニツクマウスなどの実験系を用いて蛋白凝集やcell cycleなど多面的な角度よりアプローチしています。この他にも、マイクログリアやgrowth factorに関するプロジェクトも進行中です。したがって、分子生物学、組織学、電顕、あるいは、トランスジエニツクマウスを使った経験のある人を優遇しますが、経験がなくともやる気があり、明るく、健康的で、協調性のある人なら歓迎致します。

代表的論文

1. Masliah, E. et al。 Neuron 46, 857-868, 2005.
2. Hashimoto, M. et al。Gene Ther. 11, 1713-1723, 2004.
3. Hashimoto, M. et al。J. Biol. Chem. 279, 23622-23629, 2004.
4. Hashimoto, M. et al。 Ann NY Acad.Sci. 991, 171-188, 2003.
5. Hashimoto, M. et al。J. Biol Chem. 277, 32985-32991, 2002.
6. Hashimoto, M. et al。 J. Biol Chem 277, 11465-11472. 2002.
7. Masliah, E. et al。 Proc. Nat. Acad. Sci. 98, 12245-12250, 2001.
8. Hashimoto, M. et al。 Neuron 32, 213-223, 2001.
9. Masliah, E. et al。 Science 287, 265-1269, 2000.
10. Hashimoto, M. et al。J. Biol. Chem 274, 28849-28852, 1999.

我々の研究室は、UCSDのEliezer Masliah教授の研究室とvideo を導入したreal timeのconferenceを定期的に実施（世界初の試み！？）することにより、国際的な共同研究を展開しています。

6.応募方法　以下を作製してメール、または、郵便にてお送りください。

（１）履歴書（Curriculum Vitae）
（２）研究業績リスト
（３）これまでの研究内容の概要

7. 選考方法　書類審査と面接の後、最終決定は所内の選考委員会 で行われます(秘密厳守)。適任者が見つかり次第締め切ります。

8. 問合せ先

（財）東京都医学研究機構　東京都神経科学総合研究所　病態代謝化学部門
橋本款　　電話042-325-3881　又は、beta_synuclein@yahoo.co.jp　まで御連絡下さい。

モナッシュ大学マレーシア校脳科学研究所ポスドク研究員募集のお知らせ

モナッシュ大学マレーシア校（本校オーストラリア、メルボルン）では、2006年4月に開設される医学部付属脳科学研究所のポスドク研究員を募集いたします。本研究所では、ジェノミクス、プロテオミクス、神経幹細胞、ナノテクノロジー、神経情報科学、神経行動科学の6つの研究部門を開設し、主として生殖神経科学を中心としたプロジェクトに取り組みます。

博士号を持ち、以下のいずれかの経験を持つ方（必須ではありません）を広く募集いたします。
1）分子生物学的技法（PCR、Cloningなど）
2）電気生理学的技法（パッチクランプ、カルシウムイメージングなど）
3）プロテオミクス（タンパク解析、発現解析など）
4）プログラミング（ソフトウェア開発など）

勤務地:モナッシュ大学マレーシア校　医学部脳科学研究所 (マレーシア、クアラルンプール)
任期:任期付き(2～3年)
給与:NIH給与規定に準ずる．研究経歴に応じて3段階の給与体系．健康保険補助
研究分野:神経内分泌学、神経行動学、神経発生学
募集期間:2005年8月15日～2005年11月1日
応募書類:全て英文にて作成のこと
(1)履歴書(Curriculum Vitae)
(2)研究業績リスト
(3)これまでの研究内容の概要
選考方法:書類審査および面接によりおこなう
連絡先:
〒113-8602 東京都文京区千駄木1-1-5 日本医科大学　第一生理学教室
Ishwar S. Parhar （イシュワー　シン　パーハー）
E-Mail:ishwar@nms.ac.jp
TEL:03-3822-2131 (内線5328)
FAX:03-5685-3055
URL:http://www.med.monash.edu.au/medical/malaysia/

まずはメール（英文）にてお問い合わせください．

岩手大学工学部福祉システム工学科助教授公募

募集人員:福祉生体工学講座　助教授1名
着任時期:平成18年3月1日以降なるべく早い時期

応募資格
(1)博士の学位を有する方
(2)生化学、分子生物学あるいは細胞生物学を基礎として、神経系の研究を行っておられる方
(3)専門科目および工学系の基礎科目の講義を担当できる方
応募締切り　平成17年11月30日(水）必着

提出書類
（1）履歴書
（2）発表論文等のリスト:　論文等のリストの書き方については，下記の備考を参照してください
（3）学術論文・国際会議発表論文の別刷り（コピー可）
（4）応募者について問い合わせ可能な方の氏名・所属・連絡先（1～2名）
（5）現在までの研究および着任後の研究の抱負を1000字程度にまとめたもの
(6)教育に関する抱負と担当可能な講義科目の一覧を1000字程度にまとめたもの:講義科目は、ホームページ(http://www.wel.iwate-u.ac.jp/fukushi/)を参照してください

なお、書類選考の上、面接およびセミナーをお願いすることもあります。

書類提出先および問い合わせ先
〒020-8551　盛岡市上田4-3-5
岩手大学工学部福祉システム工学科
小栗栖　太郎
TEL 019-621-6482、

E-mail ogurusu@iwate-u.ac.jp
応募書類を入れた封筒の表に「教官応募書類在中」と記して、簡易書留で郵送して下さい。

備考:　論文リストは以下のような分類で作成して下さい。
(1)　学術論文:　査読のある学術雑誌に公表されたもの。採録決定も記載可能です。ただし、採録通知のコピーと原稿コピーを添付して下さい。
(2) 国際会議発表論文、解説、総説、研究報告（各種学会研究会報告など)、口頭発表を項目に分けて記載してください。
(3) その他特記すべき事項（科学研究費等の外部資金獲得、特許など）

独立行政法人
理化学研究所
脳科学総合研究センター
テクニカルスタッフ・
実験補助員募集

【研究室の概要】
当研究室は、認知的行動における脳神経回路の機能的役割について実験データに基づいた理論的研究をしています。ラットを用いた電気生理学的実験に参加するテクニカルスタッフと実験補助員を募集します。

【募集職種、募集人数及び職務内容】

職種・人数:テクニカルスタッフ１名および実験補助員（パートタイマー）１名
職務内容（1）ラットの電気生理・行動学的実験の補助､(2)神経細胞・組織の免疫組織染色の補助など。長期的、持続的に勤務可能な方を望みます。

【応募資格】
学歴:大学学部卒以上（修士号、博士号取得者歓迎)。
経験:小動物の行動学的実験あるいは脳の免疫組織染色実験の経験を持つ方を優先。必要最低限の英語が読め、基本的なパソコン操作ができること。

【待　　遇】
テクニカルスタッフ:年度契約の任期制職員で、評価によりプロジェクト終了まで更新可能。給与は、経験、能力、実績に応じた年俸制で、通勤手当、住宅手当の支給あり。社会保険の適用あり。
実験補助員（パートタイマー):一年以内の契約で更新可能。勤務時間は、週 26 時間以内。勤務時間、曜日は応相談。時給は、所内規定に基づき、経験、能力を考慮して決定。交通費支給あり。その他、当研究所規程による（下記ホームページ参照)。

【応募方法及び締切日】
[提出書類]
(1) 市販 JIS 規格履歴書（もしあれば研究業績リストと別刷）
(2) テクニカルスタッフは推薦状３通。パートタイマーは推薦状１通または意見を伺える方１名以上の連絡先（科学研究関係者に限る)。
(3) これまでの仕事内容の概略と今後の抱負（A4 サイズ１－２枚）
[締切日]採用者が決まり次第、締め切ります。

【選考方法】
書類審査後、書類選考通過者のみ面接。
【着任時期】
採用決定後、できるだけ早い時期（相談に応じます)。

【備　　考】
詳細は理研 BSI ホームページ（http://www.brain.riken.jp）をご覧ください。具体的な問い合わせは、礒村宜和（isomura@brain.riken.jp）まで電子メールでお願いします。

【書類送付先】
〒 351-0198　埼玉県和光市広沢２－１
独立行政法人理化学研究所　脳科学総合研究センター　脳回路機能理論研究チーム（深井朋樹研究室）
担当者:定保　圭子　　TEL:048-467-6896
FAX:048-467-6899
(「脳回路機能理論研究チーム　テクニカルスタッフ・実験補助員応募書類在中」と必ず朱書きのこと）

その他

神経科学ニュースへの原稿を募集しています

求人情報、学会・シンポジウムの案内、助成金の案内のほかにも、学会への提言、研究雑感、学会見聞録、書評等神経科学の発展につながるものであればどのようなものでも結構ですので以下の要領でお送りください。

1. 原稿は電子版のみを受け付けています。原稿は電子メール添付ファイルでお送り下さい。

a. 受付可能なファイル形式はWord、EG Word（11以前）、KacisWriterです。それ以外にも或る程度対応可能ですが、事前にご相談ください。また作製に用いたアプリケーションに関わらずHTML, rtfファイルは受付可能です。テキストファイルも可ですが、その場合メール本文に埋め込んでください。

b. 画像ファイルはPICT、JPEGまたはTIFFファイルで、可能な限り圧縮して本文とは別のファイルでお送りください。

c. 求人情報、学会・シンポジウムの案内、助成金の案内に関しましては、Ａ４２段組で刷り上がり１／４ページを単位として作製してください。なお、フォントは原則として、タイトルには１４ポイント、本文には１０ポイントをご使用ください。

2. 校正は行いません（お送りいただいたファイルをそのまま利用します）ので、誤りの無いことをお確かめの上、原稿をお送り下さい。

3. ニュースへの掲載は１回のみとさせていただきます。

4. 求人情報、学会・シンポジウムの案内、助成金の案内などは特に御希望のない限り、神経科学会のホームページにも掲載します。記事の長さに制限はありませんが、可能な限り簡潔におまとめ下さい。長すぎる原稿は一部割愛させていただく場合があります。

5. 他のサイトへのリンクは原則としておこなっておりませんのでご了承ください。

6. 締切は通例偶数月の月末25日ですが、都合により変動することがあります。

7. 掲載料は不要です。

8. 原稿の送付の宛先は以下の通りです。
news@jnss.org（担当　白尾智明）宛お送りください。

編集後記

海外出張中の白尾先生にかわりまして、校正のお手伝いをしています久保@生理研が記させていただきます。
河崎先生の班会議報告の題に「・・熱い・・」とありますが、今号の原稿を拝読していて、全体の印象がまさにこれだと思いました。夏が暑かったからというわけでは無論ありません。神経科学大会の体験記では、学術的な側面はもちろん、NEUROsocialのこと、託児所のことなど、筆者の方々のそれぞれの思いが熱く語られていて、充実していた大会が鮮明に思いおこされます。また、マウス表現型解析コンソーシアム化研究会の報告では、会の背景や内容の詳細だけでなく、熱気までもが直に伝わってくるように思います。企画された白尾先生もご満悦ではないでしょうか。お忙しい時間を割いてご執筆下さった方々に心より感謝申し上げます。
ニュース編集小委員会では、今後も学会報告等の情報を充実させていきたいと考えておりますので、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

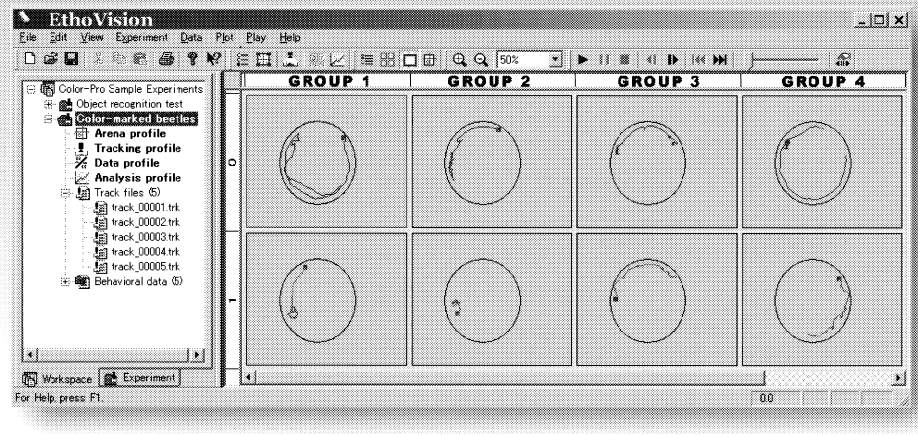
（久保義弘記）

発行：広報委員会
狩野方伸（委員長）
白尾智明（ニュース編集小委員会委員長）
入來篤史（対外広報小委員会委員長）
柚　通介（ホームページ担当小委員会委員長）

ノルダス

自動行動追跡・解析用ビデオ・トラッキング・システム

エソビジョン3.0



エソビジョンはこんな装置です

◇例えば16個並べたケージにそれぞれ2匹ずつのラットを入れ、その32匹のすべてを追跡したい…。
エソビジョンはこんな実験にパーフェクトに対応するビデオ・トラッキング・システムです。各個体の移動距離・速度、軌跡の形状、特定エリアでの滞在頻度・時間、レイテンシーなどの解析はもちろん、ソーシャル・インタラクションとして接近、回避、各個体間距離まで解析します。特に「数をこなさねばならない実験ルーティン」を力強くサポート。煩雑な作業はすべて自動化できます（上記はすべてエソビジョン・プロの仕様です）。

◇ケージはもちろん、プラスメイズ、ラジアルメイズ、ウォーターメイズ、オープンフィールド等すべての実験系に1台で完全対応します。主要な実験系には、サンプル・プロトコルを標準装備。ビギナーの方でもすぐにルーティンで使いこなせます。

さらに、格段に進歩した「バージョン3.0」では…

MPEG をはじめとするメディアファイルを映像ソースとして利用可能。これには実に多くのメリットがあります。

例えばDVDには最長で5時間もの映像を保存することができます。しかも映像のアクセスはほとんど瞬時。従来のテープ類に較べ、使い勝手・保存性で圧倒的に優れています。

メディアファイルを使用すれば、「早送りデータ取得」が可能になります。しかもテープのように時間情報が失われることはありません。パワフルなPCを使用すれば、例えば連続24時間分のデータを数時間で取得完了。

＊1. エソビジョンの完全な機能実現にはUSBキーが必要ですが、これがなくても「データ取得」以外のすべての機能を使用することができます。

さらにあります。従来、必須だったA/D変換ボードが不要です。これは、ノートパソコンでもデータの取得が可能、という画期的な事実を示します。

ノートが使える。しかもエソビジョン自体にコピー制限はありません＊1。そしてエソビジョンは、1つの実験プロジェクトの内容をたった一つのファイルに格納することができます。これを例えばネットワーク上に置けば、メイン・システムの所在に拘束されることなくどこでもデータの取得・解析が可能と言うことです。さらに複数のPCで解析を分担、などの離れ業も。

1台で、複数台の活躍。エソビジョンは、次世代の実験形態を先取りします

まだまだあります。従来からご要望の高かった、TTLパルス・ジェネレート機能を追加。例えばラットが特定エリアに入ったとき、フィーダを起動させるためのトリガパルスを出力できます。

従来はどうしても観察者の手を借りねばならなかった強制水泳実験。しかしエソビジョン3.0は独自のアルゴリズムを採用し、ラットのボディサーフェスの変化から「静・動」を自動判別し、カウントします。

詳しい資料のご請求・デモンストレーション等をご相談ください。

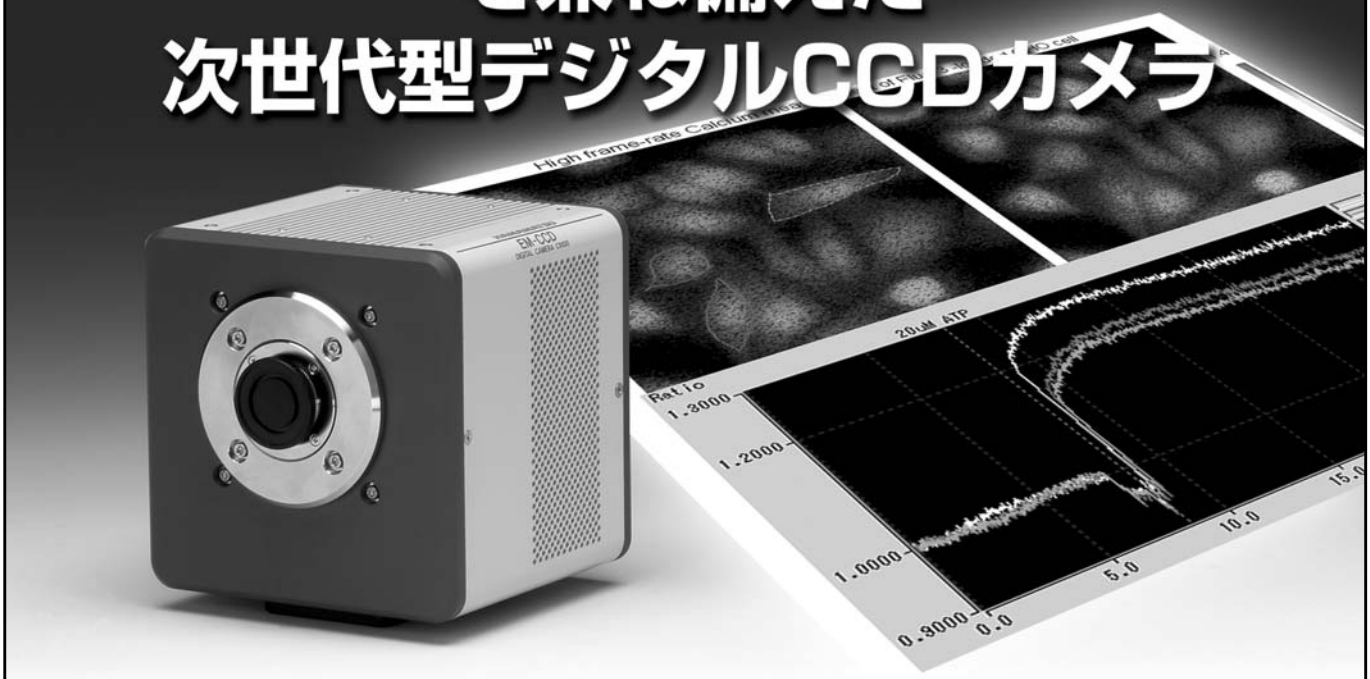
ノルダス社日本総代理店

ショーシンEM株式会社

〒444-0241 愛知県岡崎市赤渋町蔵西 1−14
TEL：0564−54−1231　FAX：0564−54−3207
www.shoshinEM.com　info@shoshinEM.com

HAMAMATSU

高速・高感度・高解像度
を兼ね備えた
次世代型デジタルCCDカメラ



これまでの冷却CCDカメラでは、困難であったビデオレートを超える微弱蛍光の高速観察や励起光低減によりフォトブリーチングを抑えた蛍光観察を実現し、多彩なアプリケーションをサポートします。

- **イオンイメージング** ▶ カルシウムをはじめとしたイオンイメージングを高解像度から高速イメージングまで幅広くサポート。
- **膜電位イメージング** ▶ 最高約2msの高速イメージングを実現。膜電位のさまざまなプローブに対応します。
- **FRETイメージング** ▶ Cameleonから分子間相互作用までFRETを高感度に検出します。
- **セカンドメッセンジャーイメージング** ▶ IP3をはじめとしたセカンドメッセンジャーのプローブに対応。新たなアプリケーションとして期待できます。
- **GFPライブセルイメージング** ▶ 励起光を最小限に抑え、生細胞へのダメージを最小限に抑えたライブセルイメージングを実現します。

EM-CCDカメラ　C9100シリーズ

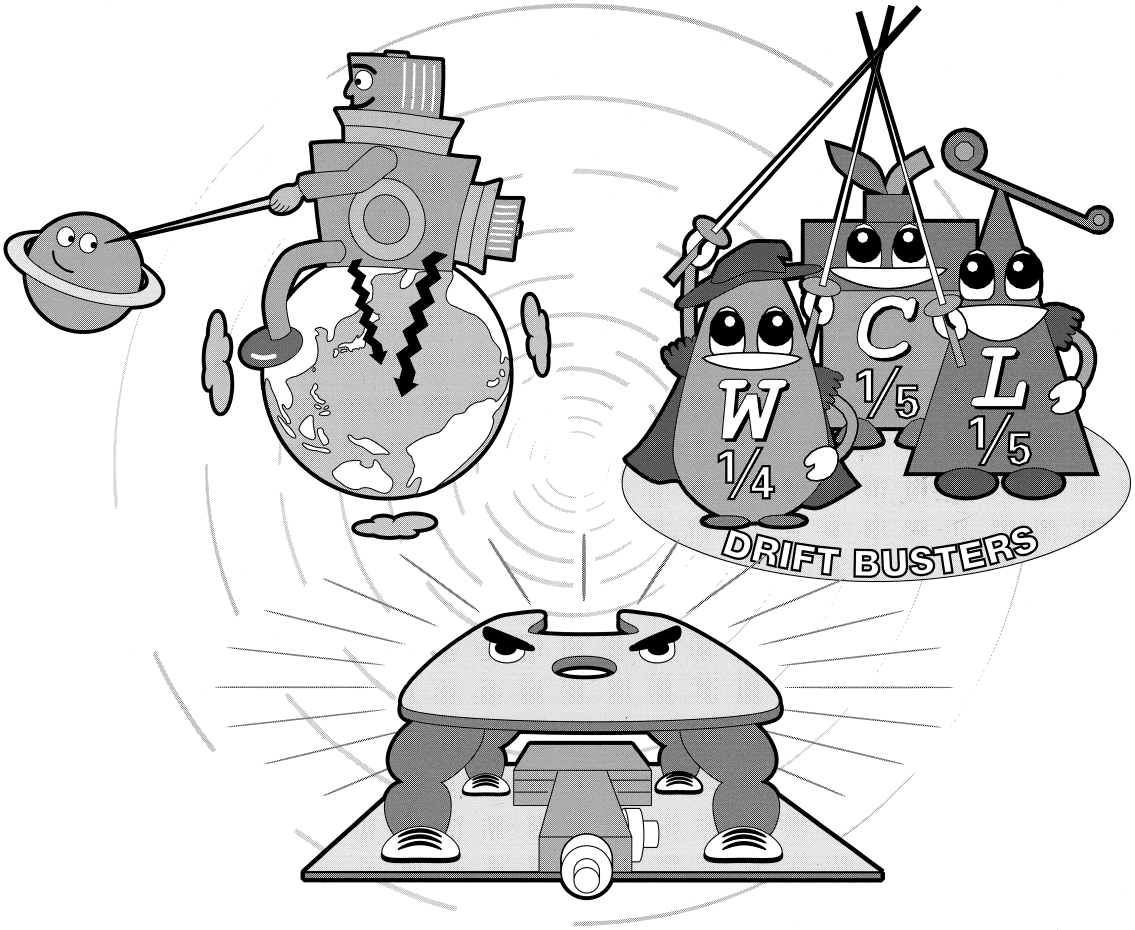
浜松ホトニクス株式会社　www.hamamatsu.com
システム事業部　特機営業部　〒430-8587　浜松市砂山町325-6　TEL（053）452-2148
E-mail　salesi@sys.hpk.co.jp
東京支店（03）3436-0491　大阪営業所（06）6271-0441　仙台営業所（022）267-0121

製品紹介Webサイト >>>　jp.hamamatsu.com

最新カタログをPDFデータで掲載しています。
ぜひ、アクセス・ダウンロードしてください。

NARISHIGE JAPAN **NARISHIGE**

Electro-physiology



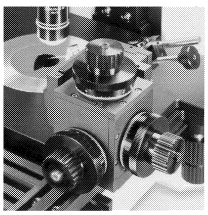
安定が一番

長時間のパッチクランプで、細胞にダメージを与えないことを最優先に考えました。

手動三次元マイクロマニピュレーター

NMN-21/25

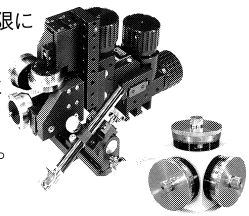
手動でありながら手の振動を針先に伝えない独自の構造を採用。電気コードやチューブがないので、電気障害などに悩まされることもなく、スッキリと設置ができます。



三次元水圧マイクロマニピュレーター
梃子式

MLW-3

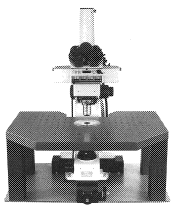
微動は400μmだけ。圧力制御を膨張係数の少ない水に、カートリッジを1:5タイプに、さらにテコの原理を応用した新機構の採用でドリフトを最小限にしました。ドリフトの発生が従来の1/100+αに抑えられます。



アイソレーションテーブルシステム

ITS-N/0/Z/Z2/L

各種顕微鏡に対応したアイソレーションシステムです。剛性、耐震性・安定性に優れ、複数のマニピュレーターを自由な位置にセット可能。大型ハンドルを装備したXYステージは、重たい顕微鏡もスムーズに移動させることができます。



詳しくは当社担当までお問い合せください。

インターネットホームページなら、他の各種製品の詳細も手にとるように判ります。 http://www.narishige.co.jp

株式会社 成茂科学器械研究所

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山4丁目27番9号 TEL.03 -3308-8233 FAX.03-3308-2005 e-mail: sales@narishige.co.jp